

1. 子どもたちよ。
主にあつて両親に従いなさい。
これは正しいことだからです。
2. 「あなたの父と母を敬え。」
これは第一の戒めであり、約束を伴つたものです。すなわち、
3. 「そうしたら、あなたはしあわせになり、地上で長生きする。」という約束です。
4. 父たちよ。
あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。
かえつて、主の教育と訓戒によつて育てなさい。

4. Kai. oi` paterej(

nh. parorgizete ta. tekna umwh

ai la. **ektrefete** auta. en paideia| kai. nouqesia| kuriouÅ

ektrefete : 心身共に養うこと (参照 5:29)

だれも自分の身を憎んだ者はいません。かえつて、これを養い育てます。それはキリストが教会をそうされたのと同じです。 5 : 29

paideia|: 「教育」 = 「パイス (子ども)」という言葉が語源 ~ 子どもを育て教えること一般を指す。

他には「訓練」「懲らしめ」「教え諭し」「教え込む、罰する (動詞) 」とも訳される。「矯正」の意も。

「行動による訓育」の意味か？

自己を抑制し、役立つように修行し、過失は正直に告白することなどをしつける意味？

聖書はすべて、神の靈感によるもので、教えと戒めと矯正と義の訓練とのために有益です。.....

「わが子よ。主の懲らしめを軽んじてはならない。主に責められて弱り果ててはならない。」 ヘブル 12 : 5

訓練と耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱つておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。 12 : 7

もしあなたがたが、だれでも受ける懲らしめを受けていないとすれば、私生子であつて、ほんとうの子ではないのです。 12 : 8

すべての懲らしめは、そのときは喜ばしいものではなく、かえつて悲しく思われるものですが、

後になると、これによつて訓練された人々に平安な義の実を結ばせます。 12 : 11

paideuthj 教師

さらにまた、私たちには肉の父がいて、私たちを懲らしめたのですが、 heb.12:9

盲人の案内人、やみの中にいる者の光、愚かな者の導き手、幼子の教師だと自任しているのなら、 rom.2:20

paideuw 懲らしめる

だから私は、懲らしめたうゑで、釈放します。」 ルカ 23 : 16

モーセはエジプト人のあらゆる学問を教え込まれ、ことばにもわざにも力があつました。 使徒 7 : 22

「私はキリキヤのタルソで生まれたユダヤ人ですが、この町で育てられ、

ガマリエルのもとで私たちの先祖の律法について厳格な教育を受け、今日の皆さんと同じように、神に対して熱心な者でした。 22 : 3

私たちがさばかれるのは、主によつて懲らしめられるのであつて...私たちが、この世とともに罪に定められることのないためです。 コリ 11 :

32

人に知られないようでも、よく知られ、死にそうでも、見よ、生きており、罰せられているようであつても、殺されず、 コリント 6 : 9

私は、彼らをサタンに引き渡しました。それは、神をけがしてはならないことを、彼らに学ばせるためです。 テモテ 1 : 20

反対する人たちを柔和な心で訓戒しなさい。もしかすると、神は彼らに悔い改めの心を与えて真理を悟らせてくださるでしょう。 テモテ 2 : 25

大いなる神であり私たちの救い主であるキリスト・イエスの栄光ある現われを待ち望むようにと教えさとしたからです。 テトス 2 : 12

主はその愛する者を懲らしめ、受け入れるすべての子に、むちを加えられるからである。」 ヘブル 12 : 6

訓練と違って耐え忍びなさい。神はあなたがたを子として扱っておられるのです。父が懲らしめることをしない子がいるでしょうか。 12 : 7

なぜなら、肉の父親は、短い期間、自分が良いと思うままに私たちを懲らしめるのですが、

霊の父は、私たちの益のため、私たちをご自分の聖さにあずからせようとして、懲らしめるのです。 12 : 10

わたしは、愛する者をしかりたり、懲らしめたりする。だから、熱心になって、悔い改めなさい。 黙示録 3 : 19

nouqesia 「訓戒」：「知性、精神（ヌース）」と「置く、据える（ティセーミ）」との合成語

他には、「教訓」「戒め」などと訳される。

具体的には、勧告、戒め、教え諭し（エペ 6 : 4）、励まし、忠告し、叱責したりの意味

古代イスラエルでは子供のためには両親によって宗教教育が施された（創 18 : 19、申 6 : 7、テモ 3 : 15）。
 人のためには、祭司やレビ人が聖所のある所やその居住地におり、
 また律法教育のために巡回して歩いた（レビ 10 : 11、歴 17 : 7、9、ハガ 2 : 11）。
 祭や、そのための詩歌それ自体が、主がイスラエルを恵み、
 彼らを国民として形成した時以来の祝福を思い起させ、記憶させるものであった（申 31 : 19、30、32 : 1、43）
 7年ごとに、仮庵の祭の時、
 イスラエルのすべての民の前で律法を読んで聞かせたのも教育の機会であった。
 主イエスは教師以上の者であったが、第一に教師であった。
 彼は少数者を選んで起居を共にし、御自身の生き方を通し、神よりの権威をもって教えられた。

これらのことが彼らに起こったのは、戒めのためであり、

それが書かれたのは、世の終わりに臨んでいる私たちへの教訓とするためです。 コリント 10 : 11

分派を起こす者は、一、二度戒めてから、除名しなさい。 テトス 3 : 10

nouqetew 動詞形

「私が三年の間、夜も昼も、涙とともにあなたがたひとりひとりを訓戒し続けて来たことを、思い出してください。」

「私たちは、このキリストを宣べ伝え、知恵を尽くして、あらゆる人を戒め、あらゆる人を教えています。

それは、すべての人を、キリストにある成人として立たせるためです。」

「キリストのことばを、あなたがたのうちに豊かに住まわせ、知恵を尽くして互いに教え、

互いに戒め、詩と賛美と霊の歌とにより、感謝にあふれて心から神に向かって歌いなさい。」

「兄弟たちよ。あなたがたにお願いします。あなたがたの間で労苦し、主にあつてあなたがたを指導し、訓戒している人々を認めなさい。」

「兄弟たち。あなたがたに勧告します。気ままな者を戒め、小心な者を励まし、弱い者を助け、すべての人に対して寛容でありなさい。」

「しかし、その人を敵とはみなさず、兄弟として戒めなさい。」

「私の兄弟たちよ。あなたがた自身が善意にあふれ、

すべての知恵に満たされ、また互いに訓戒し合うことができることを、この私は確信しています。」

「私がこう書くのは、あなたがたをはずかしめるためではなく、愛する私の子どもとして、さとすためです。」

「両親にもひとこと言っておきます。

子どもを、いつもがみがみ叱りつけ、小言を並べ立てて、反抗心を起こさせたり、恨みをいだかせたりしてはいけません。かえって、主がお認めになる愛のこもった訓練と、助言や忠告を与えて育てなさい」。リビングバイブル：「父たちよ。あなたがたも、子どもをいら立たせてはいけません。かえって、主の訓練と指導によって育てなさい。」

説教

使徒パウロは、子どもを育てる親たちに対し、

「父たちよ。

あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。」と、まずは子どもを教育する方法について教えます。

親が子どもの心をしっかりと見つめ、

親のいい加減な言動で子どもをいたずらに刺激して

必要のない怒りやイライラを起こさせないようにと、「**子どもをおこらせてはならない**」と言うのです。

そうしてから、

次に、子どもに教育すべき内容を教えます。

「かえって、

主の教育と訓戒によって育てなさい。」

「教育」と訳される言葉（パイディア *paideia*）の語源は

「パイ（子ども）」で、「子どもを育て教える」こと一般を指します。

他には

「訓練」「懲らしめ」「教え諭し」

「教え込む、罰する（動詞）」とも訳され、聖書の用例のほとんどは「訓練、懲らしめ」と訳されています。

「訓戒」と訳される言葉（ヌーセシア *nouqesia*）は

「ヌース（知性、精神）」と「ティセーミ（置く、据える）」との合成語です。

他には「教訓」「戒め」「勧告」などと訳されます。

相手の中に「知性を置く」ということから、

「教える、戒める、勧める、諭す」といったような意味になるでしょう。

子どもに対するパウロのイメージは、

同じエペソ人への手紙4章にあるように

「人の悪巧みや、

人を欺く悪賢い策略により、

教えの風に吹き回されたり、

波にもてあそばれたりする」（4:14）存在です。

つまり、

まだまだ物事をわきまえない、物事がよくわからない、

それゆえすぐに悪い人にだまされたり、世の流れに流されて生きていく以外にはない存在でした。

自分の中に確固とした善悪の基準なり信念がありません。

ですから、「人の悪巧み」や「人を欺く悪賢い策略」を見抜くことができません。

世の様々な宗教や哲学、価値観といった

「教えの風」が吹いてくると、それにズルズル「吹き回されたり」、

戦争だの流行だの時流という「波」がどっと押し寄せてくるや

ひたすら世の流れに迎合し、その「波」にうまく乗ろうと必死になることで

自分の全精力と、遂には一生を費やして、「波にもてあそばれたり」して、いたずらに時を過ごしています。

それで、

パウロは、子どもには「教育と訓戒」が必要だと考えたのでした。

彼らには世界に満ちるすべてのことを正しく判別し、理解する「知性」が必要だと考えました。

そして、

子どもが、正しい「知性」を

自分のものとしてしっかりと身につけるためには、

言葉によって真理を「教え、戒め、勧め、諭し」、

「訓練し、懲らしめ、教え諭し」て「教育する」ことが必要不可欠であると考えたのでした。

ただし、

ここで私たちが注意して読み取らなければならないことがあります。

それは、

使徒パウロの考える子どもの教育が、

単に私たちが考えるところの「教育と訓戒」ではなく、

あるいはこの世で言うところの「教育と訓戒」ではない、という事実です。

使徒パウロが私たちに勧める教育は、この世の教育ではなく、「主の教育と訓戒」です。

「主の」教育と訓戒です。

「私の」ではない、

「親自身の」ではない、

「この世の」でもない、「主の」教育と訓戒です。

それは、この世の価値基準とは全く別の、別次元のものと言えるでしょう。

この世が求めるものとは全く別の、完全に別次元のものなのです。

それでは、使徒パウロが考えるところの「主の教育と訓戒」とは何でしょうか。

「この世の教育と訓戒」とは根本的にどこが違うのでしょうか。

一言で言えば、

「主の教育と訓戒」が目指す目標は、神さまを喜ばすというこの一点にあります。

神と人に仕え、神と人を愛することが「主の教育と訓戒」の目標です。

神と人ともに有益な人材を育てることが「主の教育と訓戒」の目標なのです。

企業は企業で利潤を追求し、

国家は国家で国益を追求して、

より会社や国家に貢献できる能力を身につけることが、その人の能力と測られます。

それで、そのための教育と訓練が公立・私立の学校教育で施されます。

だから、学校で評価される基準は、

国語や英語、算数、社会、理科といった課目でどれだけ点数を取ることができるかといった尺度で評価されます。

それがまた上の学校に進学する基準ともなります。

最近では、それに加えて、学校組織や国家にどれだけ忠実であるかといった愛国心なるものも加味されようとしております。

このような基準は、結局のところ、

国家にどれだけ益をもたらすことができるか、

企業にどれだけ利潤をもたらすことができるか、

最も単純に言うと、要するにどれだけ金を稼ぐことができるかという尺度です。

しかし、使徒パウロの考える教育はそのような教育では断じてありません。

それは「主の」教育と訓戒です。

「主イエスさまが施される」教育と訓戒です。

そして、それは「主イエスさまを喜ばす」教育と訓戒なのです。

神と人を愛するものとなるよう育てる教育と訓戒です。

神と人ともに有益な人材を生み出すための教育と訓戒なのです。

神さまを信じること、

神さまを信頼して生きること、

罪を悔い改めること、

イエスさまに従って生きること、

イエスさまに従って生きるとは、

十戒を守り行って、この世で神の栄光をあらわして生きよう育てるということです。

そして、そのための「教育と訓戒」なのです。

ユダヤ人は、自分の子どもに徹底的に律法を教育しました。

ユダヤ人は、世界中、自分たちが行く所々に、神さまを礼拝する会堂を建てました。

そして、そこで自分たちの子どもに幼い時から律法を教育したのです。

「聞きなさい。」

イスラエル。

主は私たちの神。主はただひとりである。

心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。

私がきょう、あなたに命じるこれらのことばを、あなたの心に刻みなさい。

これをあなたの子どもたちによく教え込みなさい。 」

申命記 6:4-7

このみことばの通りに、子どもたちに律法を「よく教え込」んだのです。

神さまとはどういうお方か、

神さまの喜ばれることは何か、

あるいは、神さまの忌み嫌われることは何か、

神さまの栄光をあらわして生きるにはどう生きたらよいか、ということも小学校から成人するまで徹底的に教えたのでした。

そして、自分が世で生きていくための職業訓練もしました。

そうやって、子どもが世界中どこへ行っても生きていけるよう教育したのです。

食べるに困らないよう訓練しました。

罪を犯して神さまに呪われないよう、

むしろ正しく生きて、神さまの祝福を受け、さらには神の栄光をあらわして生きるよう、教育し、訓練したのです。

だから、ユダヤ人はどこに行っても成功しました。

人からねたまれて迫害されるほど、社会的にも成功を収めたのです。

良い意味でも悪い意味でも、

ユダヤ資本とユダヤ人の政治力は、今の世界を動かしているほどに世界的な影響力を及ぼしているのです。

その成功の秘訣は、徹底した律法教育です。

神さまのみこころを教える教育です。

世の流れに従うのではなく、

むしろ、この世に支配されずに、

独自に神さまのみこころを行って生きようとする時に、それが世界を動かす力となっていくという事例は、励まされます。

先日証しに来てくださった朱光朝長老の話を聞きました。

朱光朝長老が正式に小学校に入学したのは15歳の時だったそうです。

どうしてでしょうか。

学校では、神社参拝と宮城遙拝を子どもたちに強制していたため、

学校へ行くということは、すなわちそこで同時に神社参拝をし、宮城遙拝をしなければなりません。

神社参拝も宮城遙拝も、十戒の第一戒に背く罪です。

ですから、朱光朝長老は、

それはしたくない、神社参拝も宮城遙拝もすることができない、ということで、それで学校に行けなくなったのです。

そればかりか、教会付属の私塾からも追い出されることになってしまったのでした。

これは、他の朱光朝長老の他の兄弟も、他の殉教者の家族もそうでした。

孫良源牧師の長女、孫東姫勲士からも同じ話を聞きました。

学校に行きたかったけれど、神社参拝を強制されるから行けなかった、
それで、学校の門の所から、遠巻きに、朝礼で「君が代」をみんなが歌うのを眺めていたというのです。

それで、朱光朝長老は、歯医者 of 床の雑巾がけ小間使いの仕事をして（父が投獄されていたので）家計のために稼ぎました。
そして、「神さま！ 学校に通って勉強がしたいんです。他の子供たちのように。」と毎日祈ったそうです。

学校に行く代わりに、
幼い朱光朝長老が（1945.8.15 解放の時まで）七年間自分の母から受けた信仰の教育は、
一言で言えば、徹底してイエスさまに従うという教育でした。
とにかく、
学校をやめさせられようと、
配給を止められようと、
たとえ飢えても、殺されても、
絶対に、死んでも神社参拝はしない、
神さまに背くことはしない、
むしろ神さまを信頼し、神さまのみことばに徹底的に聞き従って生きる、それが朱基徹牧師の家の信仰教育でした。

毎日の家庭礼拝で朗読する聖書のみことばは詩篇 23 編でした。
「主は私の羊飼い、私は乏しいことはありません。」
これを毎朝、毎朝、朗読しました。
迫害に遭って、毎日、乏しいんですよ。
食べるものがない日もしばしばだったんです。
父親もずうっと投獄されたままで、最後は獄中で殉教するんです。
家も、牧師宅を追い出されてからは、12 回も 13 回も転々と追われて引っ越しさせられるんです。
何も無い、
乏しいことだらけです。
でも、
「主は私の羊飼い、私は乏しいことはありません。」
このみことばを毎日毎日みんなで朗読して神さまを礼拝しました。

毎日 5 時に起きては一時間づつの祈らされました。
そして、30 分づつ聖書を読まされました。
夕刻にも同じことをしました。
居眠りしていたら、母に叱られ、声を出して祈るよう言われました。
お祈りが少しでも早く終わったら、母はそれを許してくれませんでした。
信徒たちが頻りに訪ねて来る度に、母と一緒に一日に 3、4 度づつ礼拝を捧げるので、飽き飽きして嫌になったそうです。
しばしば母と共に断食祈禱をし、徹夜祈禱につきあわされました。

そうやって、朱光朝長老は、イエスさまを信じる信仰を教育されたのです。

これが使徒パウロの言う「主の教育と訓戒」です。

もしも、単に社会的な成功を夢見ていたならば、学校で学業を続けるために、神社参拝すればいいんです。

皇居に向かってちょっと礼をして宮城遙拝すればいいんです。

でも、そのように教えることは「主の教育と訓戒」ではありません。

それは「主の教育と訓戒」ではなく、「この世の教育と訓戒」です。

否、もっと言えば、「主の教育と訓戒」ではなく、「悪魔の教育と訓戒」です。

いったい誰が神社参拝していいと教えたんですか？

イエスさまですか？

聖書の神さまですか？

聖書の神ではなく、この世の神、でしょう。

聖書の神は、「あなたには、わたしの他に、他の神々があってはならない。」と言われたのです。

「わたしを憎む者には、父の咎を子に報いて、三代、四代にまで及ぼす。」と言われました。

これが聖書の神さまです。

イエスさまです。

「安息日を覚えて、これを聖なる日とせよ。」

これが神のことばです。

誰が、安息日を破って、安息日の神聖を犯して、

日曜日に学校行事があれば無条件で教会の礼拝を休んで学校行事に参加することを教えたんですか？

日曜日に仕事があれば教会を休んで仕事に行くことを教えたんですか？

神さまが教えたんですか？

イエスさまがそうしなさいと教えたんですか？

「主の教育と訓戒」は、「主のことば」を忠実に教えることです。

少しも、曲げることなく、妥協なく、そのままに、まっすぐ教えることです。

それを、子どもが可愛そうだとか何とか言って、勝手に差し引いちゃなんのんです。

それは「主の教育と訓戒」ではなくて、「人間の教え」です。

イエスさまが言われた「人の言い伝え」です。

「神の教え」をないがしろにする「人の教え」です。

うちの子もたちふたりは、日曜日の学校行事に参加しません。

だから、日曜日に授業参観があっても、運動会があっても、英語検定があっても、参加しません。

そのため、長男の一祈は、小学校の五年間（一年の時は韓国にいた）、遂に一度も運動会に参加しませんでした。

日曜日に学校を休んで何が教育かという人もいるかも知れませんが。

しかし、私に言わせると、それが教育なんです。

日曜日に学校を休ませること、それが教育です。

たとえどんなに大切な用事があっても、それを休んでも教会に行く、それを学ばせることが教育なんです。
それほど主日礼拝は大切なんだということを教えることが教育です。
そして、それほど教会の礼拝は、主日礼拝は大切なことなのだ、
神さまを礼拝するということは、この世のあらゆる用事や価値あることをはるかに越えることなのだ、
それを明らかにすることが「証し」なんです。
クリスチャンの「証し」です。
神の栄光をあらわすことです。
この罪の世に、神の栄光をあらわすことなのです。
神の御名が汚され、地に堕ちている世に於いて、神の御名の栄光をあらわすことなのです。
これが宣教です。
反対に、主の日を守りもしないで伝道しても、そんなものは「証し」にならないのです。

おかげで、うちの子どもたちは学校で有名になり、
今は学校の先生の方がいろいろ気を遣って、日曜日になるべく学校行事を入れないようにして下さっています。
その意味で、一祈とやすみは、学校に於いて、ひとつ立派に神の栄光をあらわしたと言えると思います。

また、このことは、実は、子どもたちにとっても祝福となります。
なぜなら、子どもたちは、「主の教育と訓練」によって神のことばを学んだからです。

神のことばが子どもを救います。
神のことばが子どもを助けます。
神のことばが子どもを導きます。
神のことばが子どもを守ります。
神のことばが子どもを祝福するのです。

どんなに忠実に通っても、学校は子どもを助けてくれません。
卒業してしまえば、それで終わりです。

親も、いつか必ず死にます。

国家もあてにならないし、
企業も、ただ利用されるだけで、貢献できなくなったら捨てられて終わりです。

人は当てにならないのです。

私たちを助けてくれるのは、神さまだけです。

「私は山に向かって目を上げる。」

私の助けは、どこから来るのだろうか。

私の助けは、天地を造られた主から来る。」 詩篇 121:1-2

神さまだけが、私たちを助けてくださいます。

神さまだけが、私たちを守ってくださいます。

ただ「神のことば」と「教会」だけが、子どもを守ってくれるのです。

しかも、一生、死ぬまで、天国に召されるまで、子どもの人生を守り導いてくれるんです。

世の教えは、艱難と共に吹っ飛んでしまいますが、

しかし、「主の教育と訓戒」は永遠です、永遠に変わることがない、永遠に子どもを守り、導き、助けてくれるのです。

4 . 父たちよ。

あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。

かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。

さらに、「主の教育と訓戒」は、世界を新しく造りかえます。

子どもたちばかりでなく、

学校に通う教師も生徒も主事も父兄もすべての人は、同じように日曜日に教会に来なければならないんじゃないですか。

偶像を拜んで滅びちゃならないんじゃないですか。

兄弟姉妹みなさんが、

このみことばの通りに、

「主の教育と訓戒によって」、

この暗黒の世に神の栄光を力強くあらわす子どもを「育て」られるよう、主の御名により祈ります。

訓練と指導

親の役割の一つは、主の教えに従って子どもを訓練しい指導することです。箴言は親たちに次のように命令しています。「若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない。」(箴言 22 : 6)

しかし、訓練と指導には、「従うこと」が要求されます。人は罪を犯す性質を持って生まれてくるので、幼い子どもでさえ、指導しなければ、神の道から迷い出てしまいます。天の父として、神はすべての人間を訓練されます。「父がかわいがる子をしかるように、主は愛する者をしかる。」(箴言 3 : 12)。そして同様に私たちが自分の子どもを愛し、正しく訓練することを望んでおられます。

聖書によって正しく訓練を受けた子どもたちは、善悪を知るようになります。訓練を受けないと、不安で気ままになり、どうすれば成熟した、自立した大人になることができるのかわかりません。

だからと言って、肉体的にも精神的にも、「訓練」が子どもを虐待する言い訳にはなりません。エペソ書 6 章 4 節はこう勧告しています。「父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。」

コロサイ書 3 章 21 節では、さらにもう一段階進んだ指導をしています。「父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。」このように訓練とは、単に体罰を与えることではなく、また言葉で虐待することでもありません。神の道に生きるために、人生の方向付けを与える養育を含めた、総合的なプログラムなのです。

旧約聖書では、子どもを訓練することは大変重要なことでした。申命記 21 章 18 節から 21 節では、不従順で反抗的な息子に対する罰を、一つひとつ明確に説明しています。そういう子どもたちは、町の門に連れて来られ、人々によって石打ちの罰を受けて殺されたのです。地上の両親に対してさえ、これほどの従順が要求されるのですから、天の父に従順であることはさらに大切です。

養育

子どもへの訓練には、愛育と、養育が必要です。養育抜きで、訓練ばかり行われると、精神的バランスを欠き、それが崩れたまま大人へと成長してしまいます。同様に悪いのは、養育ばかりで訓練をしないことです。聖書の中で、神が愛と慈しみを示されるとき、養育する親にご自身をなぞらえておられます。「母に慰められる者のように、わたしはあなたがたを慰め、エルサレムであなたがたは慰められる。」(イザヤ 66:13)。「あなたがたの中で、子どもが魚を下さいと言うときに、魚の代わりに蛇を与えるような父親が、いったいいるでしょうか。卵を下さいと言うのに、だれが、さそりを与えるでしょう。してみると、あなたがたも、悪い者ではあっても、自分の子どもには良い物を与えることを知っているのです。とすれば、なおのこと、天の父が、求める人たちに、どうして聖霊を下さらないことがありましょう。(ルカ 11:11-13)

子どもは、神の贈り物であることを覚えておかなければなりません。「見よ。子どもたちは主の賜物、胎の実は報酬である。」(詩篇 127:3)。

誰が御座についているのか

子どもへの訓練・指導・愛育・養育は、将来に多大な影響を及ぼします。親はどのように子どもに良い、もしくは悪い影響を及ぼしていくのでしょうか。信仰の篤い親は、信仰の篤い子どもを生み出し、罪の深い親は、罪の深い子どもを生み出します。「わたしを愛し、わたしの命令を守る者には、恵みを千代にまで施すからである。」(出エジプト 20:6)。しかし、信仰深い親でさえ、自分の子どもを適切に育てることを怠り、神の国からその子を失ってしまうことがあります。何と悲劇的なことでしょうか。子どもへの教育によって、神に対する考え方に影響が出てしまうのです。

ある神学校の教授が、「父なる神のご性質」を学生たちに理解させるのに大変苦労していたことを思い出します。ある時、「父なる神の絵を描くように」と生徒たちに言うと、何人かは、天から彼らに稲妻を投げつける、怒り狂った専制君主のような姿を描き、他の者は空っぽの御座を描き、さらに他の者は感情を持たない、冷淡な神を描きました。

それぞれの学生たちと会って、絵のことを尋ねてみると、彼らは自分たちの父親をモデルとしてそれぞれの絵を描いたことがわかりました。ある学生の父親は、専制君主のような人物で、愛情を持たずに家庭を支配していました。他の学生は子どもの時に父親から見捨てられていました。また、同じ家に住んではいても子どもには無関心な父のもとで、あるいは仕事が忙しくて父親不在の状態で育っている学生もいました。愛情深い神の姿を描いたのは、ほんの一握りの生徒だけでした。これを描いた学生たちは、愛情深い家庭環境の中で育っていました。興味深いのは、天の神のイメージに、地上の父親像が反映されていたことです。

何と悲しいことでしょうか。神から与えられた役割を親が果たさない時、子どもは大人になっても神との関係や概念に影響を受けることが、このちょっとしたテストでわかりました。その後、学生たちは、地上の間違った父親の姿が、天の父の肖像となって投影されていくことを理解し、彼らの概念を訂正することができました。

父親による子の訓練

パウロの命令は、申命記 6章 4~9 節におけるモーセの教えの繰り返しである。父親と母親の契約的責任は全く変わっていないが、そこには発展がある。モーセはイスラエルに、まず神の律法を心に刻み、それから子どもたちに律法を熱心に教えることによって神への愛を表わすよう命じた。これには、神の御言葉で満ちた日常生活様式と同じく、律法を正式に教えることも

含まれていた。パウロはその命令をキリストと関連づけることによって広げているのである。

「主の教育と訓戒」が知識のすべての領域においても徹底的に聖書的な教育を与えることを意味していることは確かであるが、教育は子どもたちをキリストを愛し、キリストに献身するよう訓練することである。父親は、キリストに似た者と成長していくように子どもたちを訓練するキリストのような教師となるべきなのだ。キリストは我々のために律法を成就し給い、その真の意味を我々に示されたお方である。キリストにあつて栄化された神の律法は、キリスト者である父親が子どもたちに受け継いでいくよう命じられている基準なのである。それによって神の御国は一つの世代から次の世代へと我々の家庭を通して成長していくのである。

「父たちよ。あなたがたも子どもをおこらせてはいけません。かえって主の教育と訓戒によって育てなさい。」（エペソ 6:4）

2 幼児期に、子どもの言いなりになる親であってはなりません

電車の大好きな子がいました。園の帰りに必ず踏切に近寄って、何本かの電車の行き帰りを見ないと満足しなくなりました。ある日、母親は来客があるので踏切に寄らずに家路につこうとしました。子どもは火がついたように泣き叫びました。三歳になる子が力の限り声の限り「電車を見る」と騒ぐのです。振り返る通行人の視線に負けて、この母親は子どもの言いなりになりました。その結果、来客は寒いなか十五分も玄関前で待たされました。**そしてこの子は、母親に従うことができなくなりました。むしろ母親を従わせ、泣きわめれば母親は自分の思いどおりになることを知りました。**これではもはや子どもを教育することはできません。

どんなに泣かれても、叫ばれても、他者に迷惑になること、道徳的に倫理的にゆるすべきでないことは、完全に断ち切ってしまう権威を親はもたなければなりません。それは根気のいる痛みの伴う教育です。しかし親は、それを力の限りを尽くして、やり通さなければならぬのです。言って聞かせてもどうしてもわがままを通すときは、お尻をぶってでも（必ず手で）、あるときは押し入れに閉じこめてでも断ち切らなければなりません。三歳くらいまでは言葉だけでは分からないこともある年代です。**泣き叫ぶことによって親や大人を支配しようとしませんが、親は負けてはならないのです。**もちろん、やみくもに暴力で押さえつけるべきだなど言うつもりはありません。しかし、親と権力争いをする駆け引きの泣き声には、断固勝利を得なければならないのです。聖書には、「愚かさは子どもの心につながれている。懲らしめの杖がこれを断ち切る」（箴言 22・15）とさえ教えられているのですから。

ひとり娘で本当にわがままのかたまりのような女の子が入園してきました。四歳でした。**気の弱い母親はこの娘の言いなりでした。**園の先生も親と同じ種類の大人だと思いこんだこの子は、一日めから挑戦してきました。

「幸ちゃん、タオルはここに掛けてね。赤いお花のシールのところにね。」担任は優しく言いました。この子はいきなり示されたシールをはがしました。そして自分の好きなシールのところのタオルを取って投げ捨て、自分のタオルを掛けました。「ここはお友だちのところなの。幸ちゃんのはお花のところなの。」先生は新しいシールをはって掛けさせようと思いました。この子はいつも母親にしているとおり、いきなり両手のつめを立てて先生の顔を攻撃しました。先生は、何も言わず、ぎゅっと手をつかんで小部屋に連れていきました。「幸ちゃん、先生の言うことは聞くのよ」ととても怒った顔で静かに言いました。この子は思いきり大声をあげて泣きはじめました。**「先生は幸ちゃんが泣いても怖くないよ。先生の言うとおりにできるまではここに入ってもらからね」と言って部屋に閉じこめました。**目がきらきら輝く頭のよさそうな四歳になる子が、なんでこうされているか分からないはずはないのです。一時間ほど扉をどンドンたたいて泣き叫んでいた子が、ふと静かになりました。この時を待っていた先生は、すぐ扉を開けて、「幸ちゃん、先生のお話分かった？」と笑顔で語りかけました。幸ちゃんはこっくんとうなずきました。先生は、まだクスンスンいっているこの子の手を引いて、タオル掛けまで連れていきました。この子は指示された場所にタオルを掛けました。**こうして、先生は主導権を取ったのです。それからは、まるでつきものが落ちたように従順になりました。その後もかんしゃくを起こすことが数回ありましたが、次第に従える子に変わっていき****ました。**

こうして従うことをきちんと教えておけば、四、五歳になると次第に、言って聞かせれば分かるようになります。 小学校に入ってから、決して手をあげてはなりません。どんなに理屈を言っても、それは違うということをきちんと言葉で理解させましょう。真夜中に大きな音を響かせ、群れをなして暴走しまわる若者たち、自分の憂さを晴らすために、まわりのことを、親の心配を、少しも考えられない子どもにしてしまう芽は、今つんでしまわなければならないのです。**「愚かさは子どもの心につながれている。懲らしめの杖がこれを断ち切る」**のです。成人してからも、「自分はこうしようと思うんだけど、どう思う？」と相談をもちかけられるような親になるには、**今、しっかりと主導権を確立しておかなければならないのです。親が子どもの奴隷になってはいけません。**

3 社会の秩序に従う訓練をしておきましょう

年ごとに高校中退者が増え、去年は十二万人を超えたことがニュースになりました。小、中学生の不登校も六万三千人という勢いで増えています。たぶん水面下では、予備軍がその何倍もいることでしょう。もちろん、その原因はいろいろあって、一概にこれとは言えませんが、十年前、二十年前には考えられなかった数字です。子どもの心が、本当にもろくなっているなあと実感します。昔は積極的に乗り越えることのできたことが、今はできなくなっているのです。**友だちとのちょっとしたトラブルにつまずいたり、思いどおりに動いてくれないまわりにいらだいたり、分からないことがでてくるとすぐに投げ出してしまうのです。そして一方では、むしろ人格的によく育っている子ほど適応できなくなっているように思われる場合も多いのです。**つまり、社会や家庭内で秩序やルールを守れない子たちが多くなり、人格的によく育っている子たちのほうが、はじき出されてしまっているように思うのです。

元気のいいお兄ちゃんをもつ男の子がいました。八歳年が離れていました。いつも母親はこのお兄ちゃんをほめちぎり、お兄ちゃんのようになることを押しつけました。**家庭で認められないこの子は、学校に入った時、お兄ちゃんの言う言葉、行動をそっくりまねしました。家庭内で弟を支配し、母親まで手なずけているこのお兄ちゃんのとおりです。三年生になった時、立派なクラスのボスになりました。彼の言いなりになるしか身を守る方法がないと言われるほどクラスを支配しました。そして、五年生になった時、三階の窓から身を乗り出して飛び降りてやると先生を脅迫する子になりました。このルールをわきまえない一人の子に、大げさに言えばクラスじゅうがかきまわされたのです。**これほどでなくとも、大なり小なりこのような種類の子が増えているように思います。

小学校一年生を受けもった先生が、年ごとに子どもたちが騒がしく、言うことを聞かなくなっていると嘆いておられました。学校でのさまざまな問題の芽は、実は入学前の家庭の教育のあり方にあったという例が多いように思います。

親はもっと権威をもって、もっと自信をもって、そして豊かな愛をもって子どもをはぐくんでいかなければなりません。子どもが生まれたその時から、子は親や大人に従うこと、そして親や大人は従ってもらえるような人格に自ら育つことを心がけたいものです。

2 父の家庭での役割

- ・聖書は「父たちよ。子どもを怒らせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです」といいます(コロサイ3・21)。それは父が横暴になりやすいからです。父は強くなければなりません。しかしその強さは、子どもが尊敬と愛をもって、服従するような品性に表われた尊厳さで、ただ威張るようなものではありません。一方的な押し付けや感情

的な怒りは子どもを脅えさせ、無気力にさせ、または、反抗的にさせます。

- ・子どもは、父を愛し敬い、従うことを身につけ、さらに大きな権威である神様への従順と服従を学んでいきます。ですから父は、子どもにとって、尊敬に値するような存在でなければならないのです。
- ・父は子どもを教え、命じ、懲らしめ、訓練もします。人間としての成長や「天の父」である神様に従うようにさせるためです。ですから、父として自分の生き方が見本になるように、子どもの前に神様の栄光と恵みを映すように生活することが期待されるのです。

3 学びたい父の姿

- ・良い例、ヨセフ（マタイ 2・13～21）。ヨブ（ヨブ 1・1～5）、放蕩息子の父（ルカ 15・11～32）、
- ・悪い例は、エリ（サムエル 2・22～24）です。
- ・学びたい父の姿は、ルカ 11・11～13、テサロニケ 2・11～12、コリント 4・14～16、ヘブル 12・7～11です。

1 1 2 子どもの養育……母

1 子どもの養育

母としての最大の使命は、子どもの養育でしょう。特に家庭での教育は人間形成の基礎づくりです。母としての女性の特徴は、自分を生かそうとするよりも、他のために生き、他を幸せにし、他を生かすところにあります。その特性を、子どもの心の教育のために役立ててほしいと思います。

2 何を教えるか

正しい心の教育は、宗教によるしかありません。学校教育は人の心を育てません。

- ・神を畏れること……箴言 9・10、伝道者の書 12・1。創造者を知り、そのお方を愛し敬い、その御心に従って生きることが人間にとっての本分であるということです。
- ・従うこと……エペソ 6・1～3。わがままを通さないということ、両親に従うことを身につけること、両親への服従は神様に従うことの第一の訓練です。服従は人に従うことから始めて、神様への服従に高められて行きます。子どもは従うことを学ぶべきです。
- ・祈ること……祈ることは、子どもには自然のことです。祈りを通して子どもたちは、祈りに応えてくださる生きた神様を、自分のものとしていきます。
- ・聖書を読むこと……箴言 6・20～23、テモテ 3・14～15。世の中のいろいろな考えが身につく前に、不変の真理、天の思想が子どもたちの心を形造るように、また聖書に親しむ習慣づくりも大切なことです。

3 良い例、悪い例

- ・良い例は、モーセの母（出エジプト記 2・1～2）ハンナ（サムエル 1・10～11、21～28）、テモテの母ユニケと祖母ロイスからは敬虔な母の姿を学びます。信仰を娘に伝え、その娘は息子のテモテに信仰を伝えて（テモテ 1・5）、伝道者にしました。
- ・悪い例は、エリ家庭（サムエル 2・12～17）、サムエルの家庭（サムエル 8・2

父親による子の訓練

パウロは子どもたちから始めるが、責任がより重いのは明らかに両親、特に父親の方である。教育は父親の責任である。母親の方が子どもたちと過ごす時間は多く、実際に毎日の教育の働きをしているのも母親であるが、父親の責任は変わらない。父親は神礼拝と神知識において家庭を導く家庭の祭司かつ聖書の教師である。家庭におけるキリストの代表として、特に子どもたちに関してその権威と責任は大きい。そのため、父親がキリストのような公平と愛のうちにふるまうことはますます重要なことである。罪人であるため、権威にある人間はみな、父親も含めて、軽率や横暴な判断への誘惑を受ける。

父親の責任は子どもたちに神の御言葉を教えることである。それがパウロの言う「主の教育と訓戒」の意味なのだ（6:4）。パウロの命令は、申命記 6 章 4～9 節におけるモーセの教えの繰り返しである。父親と母親の契約的責任は全く変わっていないが、そこには発展がある。モーセはイスラエルに、まず神の律法を心に刻み、それから子どもたちに律法を熱心に教えることによって神への愛を表わすよう命じた。これには、神の御言葉で満ちた日常生活様式と同じく、律法を正式に教えることも含まれていた。パウロはその命令をキリストと関連づけることによって広げているのである。「主の教育と訓戒」が知識のすべての領域においても徹底的に聖書的な教育を与えることを意味していることは確かであるが、教育は子どもたちをキリストを愛し、キリストに献身するよう訓練することである。父親は、キリストに似た者と成長していくように子どもたちを訓練するキリストのような教師となるべきなのだ。キリストは我々のために律法を成就し給い、その真の意味を我々に示されたお方である。キリストにあって栄化された神の律法は、キリスト者である父親が子どもたちに受け継いでいくよう命じられている基準なのである。それによって神の御国は一つの世代から次の世代へと我々の家庭を通して成長していくのである。

2002 年 5 月 5 日 第二礼拝説教要旨 エペソ人への手紙 6：1－4

「子どもたちへの福音」

吉平 敏行 師

今日は、子どもの日。子供たちに励みになるテーマとして 4 節を中心に、子どもに対する二つの両極端な考え方がある。一つは、イギリスの桂冠詩人ウイリアム・ワーズワスの詩「虹」に表わされた、子どもの中に、理想化された人間を見る見方。もう一つは、箴言の 2 章 1 5 節に見るあまりに現実的な、子どもの側面。これら子どもを測る両極は、今日の子育てにも見られる。子どもは本来素直であって、親の厳しさがそれを歪めていく。子どもを個として尊重することが、自立を早め責任感も育てる。スパイクは一切しない、という立場。もう一方で、極端に厳格なしつけには反対だけれども、やはり子どもには根強い反逆性が潜んでいる。スパイクも含めて訓練を施さねばならないという立場。生来の子どもの中に「善」を見るのか「悪」を見るのか。その中間に、成長段階に応じた訓練を施すという考え方がある。そうした考え方の違いがあることを認めた上で、今日の 4 節を取りあげる。

本論

2) 主の訓練と戒め

それでは、親としての権威を正しく用いるとは、どういうことか。「かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい」に、子どもとの積極的な関わりが出てくる。ここでパウロがあげているのが「教育」と「訓戒」。より正確には「訓練」と「訓戒」と訳す方がよい。

1) 「訓練」

今は「訓練」のみならず、訓練という言葉自体を嫌う時代。一体何のために「訓練」が必要なのか。

「訓練」とは、「組織だった教育の活動」であり、ある方向性と計画性を持つもの。方向性とは、目指すべき目標がある、ということ。先が見えているから、計画が立てられる。この年齢ではこのぐらい、このレベルに達したらこのぐらい、と段階を追って、高飛びのバーを少しずつ上げるように、レベルをあげていくことができる。本人も少しやっつては、自信を付けていくことができる。

課題は、親がどれほど子供たちに手をかけてあげることができるか、である。親も忙しい時代の中で、なかなか難しいが、勝負は10年。子どもに時間を割いてあげよう。

2) 「訓戒」

これは、訓練よりも少し厳しい。「叱る」ということばが適切かも。もとは「心を建てる」という意味。「心」の深いところに「反抗」がある。正しく扱わないと捻れていってしまう。「訓練」が系統だった教育であって、知性の発達や正しい道筋を付けるとすれば、「訓戒」は意志と感情に根ざした、より深いところを扱うことになる。子供の命に関わる。叱責なくして誤った道から正されることはない。大人になると残念ながら「叱責」を受けることが少なくなる。残念ながら、大人になっただがままになる人もいる。私たちは子どもを怒らせることなく、適切な指導と叱責をする必要がある。

こうして、訓練と訓戒で子どもを養い育てる目的は何か。私は全ての教育は「子ども自身の益となるためになされる」と考える。子ども自身が、若き日の誘惑とも戦いながら生きていく中で、本当に自由に生きる喜びを味わっていけるように支えてあげること。できるものならば、彼らの選択の中に良いものを選び取る信仰も織り込ませたい。本当の自由は、信仰によるしかない、と確信する。

今日残念なことは、信仰を持っているという親の信仰自体がことばや形だけとなって、子供たちの足枷となっていること。子供たちにとって、私たち大人が信じているキリスト教は、魅力あるものなのか。私たち自身が、本当に魅力ある大人なのか。もしも親からそうした生きる力としての信仰が伝達されたら、子供たちはやがてその信仰に引かれていくことであろう。

申命記の6：20～21。この子どもからの質問は過越しの祭りについても書かれている。注目したいのは、子どもが成長する過程で必ず我々に、その生き方を問う時がある、ということ。何故自分の家庭はこういう生活をするのか。何故、自分の親は世間一般の親と違って、そういう考え方をするのか。何故他の子供たちは許されるのに、自分はそれが許されないのか。そうした、子どもからの質問に答えられるようにしたいもの。訓練にしる、訓戒にしる、思いつきでできるものではない。一貫性の中で、きちんと説明できるものでなければならない。

私たちはある年齢に達すると、いつのまにか自分自身も、ある両親の子どもであったことを忘れてしまう。そして、自分の両親がこうした聖書の教えも知らずに、自分を邪険に扱ったり、心ない暴言を吐いたりしたことが浮かんで来て、自分もまた傷ついた一人の子どもであることを思い出すことがある。それが両親である故に、私たちは逆らえずにこらえてきた。それは、「父と母を敬え」という律法を守ったことしるしかも知れない。聖書は「そうしたら、あなたは幸せになり、地上で長生きする」という。主はご存じである。今「天の父よ」と呼べる方がいる。その父のもとで、今までの荷を降ろして見ようではないか。

開成高校・息子殺人事件 - 経緯 -

昭和52年10月30日未明、飲食店経営のA(当時47歳)が東京の名門・開成高校に通う1人息子のB少年(当時16歳)を絞殺した。その後、Aは妻(当時44歳)と自殺するため浜名湖へ行ったが目的を果たせず妻に付き添われて31日、警察に自首した。

警察の事情聴取でB少年の凄まじい家庭内暴力が明るみになった。

B少年は小学校時代は常にトップで名門開成中学にも上位で合格した。

試験で満点を取ると駆け足で自宅に戻り両親の喜ぶ顔が唯一の楽しみであった。

反面、成績が下がれば《絶望の境地》であった。

開成高校へ進学した頃からB少年に変化が出始めた。

学校では「おとなしく、問題が見当たらない良い息子」が

帰宅すると「人を殺したい気持ちを我慢してきた」と泣き叫び、

手当たり次第に物を投げたり、部屋中に水を撒いたり、

布団を池に投げ入れたり、祖母・母を殴る蹴るの暴行を連日繰り返した。

近所でも、A宅から連日泣き叫ぶ声や物が破壊される音が聞こえ苦情が出ていた。

事件の直前にはAも息子から暴行を受けて、現場に急行した警察にB少年は精神病院に収容させられた。

その後、精神科に通いカウンセリングや薬療法など様々な努力を試みたが

成果はなく「医者から完治は無理」と宣告され、Aは相当のショックを受けた。

- 試験が全て -

思い悩んだAは30日の未明、寝入っているB少年の首に手をかけて絞殺した。

息子は、殺される前日の夜

「青春を返せ！人生を返せ！俺をメチャクチャにしたのはおまえらだ」と母親を追い回したという。

B少年は、勉強以外に趣味は無く、友人もない内向的な少年だった。

「試験＝人生そのもの」の構図が、一度成績が下がると絶望となってしまいう偏向的な人格に育ってしまった。

昭和53年2月16日、東京地裁は、Aに対して懲役3年・執行猶予4年の判決を下した。

これに対して、検察側は「暴力の原因は父母にある」として控訴したが東京高裁で棄却され一審判決が確定した。

母親は、7月2日に「主因は自分の教育にある」と遺書を残して息子の部屋で自殺した。

金属バット殺人事件

1980年11月29日午前2時30分頃、神奈川県川崎市の一柳幹夫さん（当時46歳）宅で

就寝中の父親に向けて、次男の一柳展也（当時20歳）が金属バットで殴打した。

父親は声を立てる間もなく頭を割られて即死。続いて、別室で寝ていた母親・千恵子さん（当時46歳）も同様に殺害した。

傷は頭と顔に集中し顔から頭にかけて割れ人相の判別ができなかった。現場検証した警察官がたじろくほどであったという。

展也は犯行後、

金属バットを風呂場で洗い返り血を浴びた服を着替え、室内を荒らして強盗殺人に見せかけるべく第一発見者を装った。

だが、翌日になって捜査員の質問に曖昧な部分があり厳しく追求した結果、犯行を自供し逮捕された。

- 親の期待と負担 -

展也の家庭は、東大卒の父親と短大出の母親、兄が早大卒のエリート家庭。

しかも、父親と兄は一流会社勤務に対して、展也は早大など多数の大学受験に失敗し二浪中であった。

予備校生は東京都生まれで、私立海城高等学校卒。16歳の時都内から事件が発生した住宅地へ引っ越すことになる。

野球が得意。母親からは手間のかからない子供といわれた。

父親は上場企業の支社長で、東京大学卒ということもあって厳格な性格で、韓国歌謡を好んだ。
兄も事件の前年に早稲田大学を卒業後に上場企業に入社している。

その後の裁判で、

父親のキャッシュカードから1万円を抜き取ったこと、部屋でウイスキーを飲んだことで父親から罵倒されたことが判明。
二浪で不安定な精神状態にあって、父親からの罵倒が鬱積し衝動的に犯行におよんだと供述した。
子供の時から「この子には反抗期がない」と母親が言うほど手間がかからなかった展也が、
心に貯めていた封印を取り外した瞬間に殺意を爆発させたのだろうか。

高校入学時から成績が落ち始め、早稲田大学などの受験に失敗、予備校へ通うが成績は伸びなかった。
このため精神的負担が増大し、レコードを買うために父親のキャッシュカードを無断で使用したり、飲酒をするようになる。
両親の銀婚式が行われた事件前夜にこの行為が両親に見つかり、叱責、足蹴にされる。
「明日中に追い出してやる」と父に言われ
自分の居場所を失ったと感じた予備校生は数時間後、酒を大量に飲んだ上で両親を金属バットで撲殺した。

昭和59年4月25日、横浜地裁・川崎支部は展也に対して「懲役13年」を言い渡した（求刑18年）。判決後の展也は「温情のある判決」と弁護士を通じてコメント。控訴せず結審した。
予備校生はほぼ直後に警察に通報、「強盗による殺害」と証言したが、翌日証言の矛盾点を指摘され自白、逮捕される。
奇しくも父親の大学時代の同期生であり親友だった河原勢自弁護士が私選弁護人に選任された。

1984年4月25日、横浜地方裁判所川崎支部で、「被害者側にも重大な落ち度はあった」とした検察の求刑懲役18年に対し、
裁判長は「被告人は心神耗弱だった」、「偽装工作が稚拙で姑息である以上、自首したも同然」として懲役13年の判決を下す。
予備校生は「温情判決である」として控訴せず有罪確定。
元獄中仲間である見沢知廉の「囚人狂時代」シリーズによると、
服役中は、紅白野球大会での言動をきっかけに別の獄中仲間からひどいいじめを受けていたらしい。
現在は更生し、南アジア地域にてNGO（非政府組織）のボランティア活動をしている模様。

金属バット殺人事件

1996年11月、東京都内のマンションの一室で、家庭内暴力に悩む父親が、14才の長男を金属バットで殴り殺し、社会に大きな衝撃を与えた。事件発生当時よりも、家庭内暴力の詳細が明らかになった時の方が、世間の関心は高まった。なぜこのような事件が起きたかに関して、キャスターや評論家たちがいろんなことを言っていたが、私は、この家族の病理は、ファルスの不在にあると考えている。そして長男を殺害した父親は最後までこの原因が分かっていなかった。そして、分かっていなかったからこそ、最悪の結果に終わったのである。

1. 理想的な家庭的背景

父親は、東京大学を卒業後、当時倍率百倍の難関であった東京都内の出版社に就職したエリートだった。しかし出版社では、編集者として、哲学、教育、障害者問題などの本を手がけ、「それまでは、能力主義的な考え方をしており、能力がある人が優れていると思っていたが、障害を持っている人も価値は同じであるという考え方に変わっていった」。その背景には、自分自身が子供の頃、吃音という障害で悩んでいたことがあった。

母親も同じような考えの持ち主で、東京のエリートの家庭がよくやるように、名門私立中学を受験させるために長男に学習を

強制するようなことはしなかった。長男は、小学校時代には塾に通わず、公立中学に進学する。教育評論家たちの決り文句を使うならば、長男は「偏差値教育に毒されることなく、自由にのびのびと育った」ことになる。

1991年にソ連が崩壊し、社会主義的傾向の本を出版していた父親は、自分の仕事に挫折を感じるようになり、92年に出版社を退社して福祉の道を歩むことにした。しかし慣れない仕事に適応できず、95年には、学術団体の事務局に転職した。長男の家庭内暴力が始まったのはその1年前からであった。

父母は二人とも子供に厳しくなかった。社会主義的な理想から、子供を甘やかした。小学校時代の担当は、長男を「他の児童に比べて少し甘えん坊のところがあった」と評している。中学校でも、「陽気で元気のいい子」としながらも、「集中力がやがまん強さに欠け、わがままな面もある」という評価を受けている。

ある日、長男は同級生から「おまえのお父さんは優しいね」と言われた。当時の父親は、自分が優しいと思われていることをうれしく思った。しかし後に「それは、お父さんが弱いという意味かもしれない」と回想している。学校という、家庭とは異なった外部世界で、長男は自分の家庭におけるファルス[p]の不在に気が付くようになったのだ。自分の家庭には強い父親がいない。弱い父親によって自分は弱い人間として育てられたのだ。こう彼は思うようになったのではないだろうか。家庭にファルスが存在しない以上、長男には、自分がファルスとなること、自分が強い父親となることしか残された道はなかった。

[p] ファルス (phallus) とは、男根を意味するラカンの用語で、ペニスとは異なり、肉体の一部ではなく、象徴的な欲望の対象、欲望を生み出す欠如そのもののシニフィアンのことである。幼児は母に欠け、母の欲望の対象であるファルスになろうとするが、やがて自分がファルスではないことを知り、自己の外部にそれを求め、《ファルスをめぐるシニフィアンの連鎖》と呼ばれる欲望の回路に取り込まれて行く。

2. 暴力と愛の限界

長男の暴力は、初め母親に、やがて父親にも向けられるようになる。ある日、長男は父親に、「土下座しろ」と命令した。土下座すると、長男は父親を足で蹴ったり、手で殴ったり、コタツの板を投げつけた。暴力を振るう長男を父親が見上げると、長男は涙を流して泣いていた。これを見て、父親は、「長男もつらいんだ、苦しんでいるのは長男だ」と確信して、暴力を受け止め、長男のするがままにまかせることにした。長男に無制限に優しくすれば、長男は親の愛を受け止めてくれると思ったのである。しかしこれは逆効果であった。

なぜ長男は、父親が命令に従って土下座したのに、暴力を振るって泣いたのか。長男の「土下座しろ」という命令は、父親に、息子の理不尽な命令を拒絶し、父親らしい毅然たる態度を求めている。だから命令に文字通り従うことは、長男の欲望には反していた。ちょうどインポテンツに悩む男性が、立たないペニスを嘆き悲しむように、長男は、挑発的な言葉を投げかけても「立たない」父親を嘆き悲しんだのである。

長男は、自分の部屋で母親にも土下座させた。すると長男はひざまずく母の頭を足で踏みつけた。血しぶきとともに前歯が折れた。やがて母親は、エスカレートする長男の暴力に耐えられなくなり、家を出て、別居を始める。長男の暴力はもっぱら父親が一人で引き受けることになる。父親は、日常的に長男の暴力にさらされ、鼻の骨を折るなど生傷が絶えなかった。

長男は、父親に服やおにぎりやファミコンの攻略本などの買い物をもじり。そして父親が買ってくると、「てめーなめんなよ。

何でこんなものを買ってきた。返してこい」と罵声を浴びせて父親を殴打する。長男は、買ってきたものが気に入らないから暴力を振るっているわけではない。もし気に入ったものを入手したいのであれば、あらかじめ細かく注文するはずである。しかし彼はわざとあいまいに買うものを指定する。暴力を振るうことが目的で、「気に入らないものを買ってきた」という理由は口実に過ぎない。

長男の暴力を放置した責任は父親だけにあるわけではない。中学2年の9月ごろ、父親は、無抵抗を勧める精神科クリニックの医者から「奴隷のようにこき使われて耐えがたい」と訴えた。しかし医者は、「そういう対応するのモ子供をよくするための一つの技術だと思ってください」とアドバイスした。父親は、「先生の言葉にほっと安心した。それ以降暴力を受け入れることがおかしいことだとは思わなくなった。つらかったが、暴力を受け止めるための軸になったのが、この『技術』という言葉だった」「私は暴力をほとんど体験しておらず、予想もしていなかった。だから驚き、本もたくさん読んだ。しかし、暴力を振るう子供を受け入れても、絶対に暴力自体は受け入れてはいけないという本や相談機関にはめぐり合わなかった」と回顧している。

父親は、同じ悩みを抱える親の会にも入った。その会でも、親たちは、子供の暴力を無抵抗で受け入れるべきだと考えていた。皮肉な見方をすれば、家庭内暴力は、そうした考えを持つ親のもとで起きているということが言えそうである。

父親の自己犠牲的な長男への愛は、長男を幸せにはしなかった。中学2年の冬、父親が職場から帰ると、長男が、裸同然でぐったりと倒れていた。精神科クリニックからもらった錠剤を8錠も飲んだのである。そのとき長男は、「おれなんか生きていたってしょうがない」とつぶやいた。

3. 理解されなかった愛の終焉

そして中3の冬、睡眠不足と暴力に耐えられなくなった父親は、金属バットを寝ている長男の頭に振り落とし、わが子を絶命させた。父親は、長男殺害後、しばらく「罪の意識も後悔もなかった」「ほっとしています」と語る。しかし事件から2ヶ月ほどたつと、後悔の念がふつつつと生まれ、「長男の立場に立って考えたとき、許されないことをしたと初めて思った。長男のむなしさを思う気持ちが初めてわいてきた」と法廷で述べている。

この長男の殺害は、フロイトの原父殺害のストーリーを連想させる。この家庭では、父子の主従関係が、象徴的に逆転していた。父親も、長男が「この家で一番偉いのは自分であると口にした。自分がこの家の支配者の立場を取るようになった」と認識していた。フロイトの原父殺害のストーリーで、息子たちが、残酷な父親を殺害した後、殺害を後悔するように、父親も、象徴的父親であった長男を殺害し後悔する。そしてエディプスが父親殺害の後、自分の目をつぶして「去勢」したように、金属バット事件の父親も、減刑を一切求めず、懲役3年の実刑判決を控訴せずに受け入れ、象徴的に去勢したのである。

金属バット殺人事件での家庭崩壊は、ソ連の崩壊と同時期に起きた。ソ連は、社会主義体制のもとで、国内産業を国際競争力のある強い産業に育てなかった。そのためソ連は崩壊し、その後ありとあらゆる犯罪と無秩序が横行した。そうした秩序崩壊の反復が、社会主義の理想に基づいて子育てをした日本の一家庭で起きたと見ることはできないだろうか。

キリスト者の家庭教育

J・C・ライル

「若者をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば年老いても、それから離れない」 箴言 22:6

何年か教会に来ているキリスト者なら、ほとんどの人はここにあげた聖句に見覚えがあるだろうと思う。この言葉の響きは、おそらく古い調べのように耳なじみのものであろう。読者も、この言葉を耳にしたり、読んだり、口にしたり、引用したりしたことが何度もあったのではなかろうか。

しかしそれでいながら、この聖句の中身については何と多くがなおざりにされていることであろう。ここにふくまれている教理はほとんど知られていないように見える。ここに記された義務を実践している人は恐ろしいほどまれにしかいないように思える。このことに、だれが異論を唱えられるだろうか。

これが目新しい主題であるとは云えない。世界が始まってこのかた、すでに何千年も経っており、私たちにはほぼ六千年に及ぶ経験の助けがある。また現代は、あらゆる方面で過熱気味に教育がなされている時代である。新しい学校が創設されたという話は至るところから聞こえてくる。巷では、ありとあらゆる種類の幼児教育システムや早期教育本が喧伝されている。しかしこうしたもろもろの事実にもかかわらず、子どもたちの大半がその行く道にふさわしく教育されていないことは火を見るよりも明らかである。成人したとき神とともに歩む者がほとんどいないからである。

さてこのような実状をどのように説明すればよいだろうか。はっきり云えば、この聖句にある主の命令がかえりみられていないということである。だからこそ、この聖句にある主の約束が実現しないのである。

こうした事柄を見ると、心に大きな痛みを覚えない者があるだろうか。それゆえ今、一牧師が語るこの勧めの言葉に耳を貸していただきたい。実際、正しい教育のあり方というこの主題は、あらゆる人の肺腑をえぐるべき問題である。だれしもみな自らに問うてみなくてはならない。「この点で私は自分にできることをしているだろうか」、と。

自分はそんな主題と関係ないと云える人はごくまれである。これと無関係な家庭はほとんどないと云ってよい。親はもちろん、乳母であれ教師であれ、名付け親であれ伯父伯母であれ、兄弟であれ姉妹であれ、いかなる者も無縁ではいられない。どんな人も、子どもを持つ知人があるなら、その家庭のおさめ方に何らかの影響を与えられるし、提案や助言を与えることで、その子たちの教育に影響を与えられるであろう。私たちはだれしも、直接的にであれ間接的にであれ、この方面で何かができるのではないだろうか。だから私は、すべての人の関心を喚起して、この問題を心に覚えてもらいたいのである。

さらにまた子育てという問題には、当事者になるとだれしも義務を怠りがちになるという大きな危険もある。これほど自分の欠点より他人の欠点が目につくことはない。人はしばしば、知人友人に向かっては、しつげがなっていないと批判しておきながら、自分の子どもをしつける段になると、まるで同じようなことをしがちである。他人の家庭のちりは見えるが、自分の家庭の梁は見落としてしまう。よその家の間違いには驚のように目ざといのに、自宅で毎日なされている致命的な過ちにはコウモリのように盲目になる。兄弟の家庭については賢いが、血を分けたわが子のこととなると愚鈍になるのである。それゆえ他のことはどうあれ、子育てにおいては、自分の判断はあてにできないと思ひ定める必要がある。これもまた、頭に置いてお

いた方がよい*1。

さてそれでは、これから正しい教育のあり方について二三の示唆を述べさせていただきたい。願わくは、父なる神・子なる神・聖霊なる神がそれを祝福し、読者全員にとって時宜にかなった言葉としてくださるように。齒に衣着せぬ率直な物言いだからといって拒絶しないでいただきたい。云い古されたことだからといって馬鹿にしないでいただきたい。わが子を天国に入れるように教育したければ、以下に記すことは軽々しく無視してよいことではないのである。

1. まず第一に、子どもを正しく教育したければ、子どもの行きたがる道ではなく、行くべき道に向かって教育しなさい。

忘れてはならない。子どもたちには、生まれつき悪へ向かう決定的な偏向がある。それゆえ、子どもを好き勝手にさせれば、悪を選ぶに決まっている。

いとけない幼子をいだく母親は、その子がどのように成長するか知ることはできない。背の高い子になるか低い子になるか、病弱になるか頑健になるか、頭の良い子になるか悪い子になるか----どんな子にでもなりうるし、はっきりとしたことは何もわからない。しかし確実に云えることが1つだけある。それは、その子が腐敗した、罪深い心を持つようになるだろうということである。私たちにとって悪を行なうのは自然なことである。ソロモンは云う。「愚かさは子どもの心につながれている」(箴 22:15)。「わがままにさせた子は、母に恥を見させる」(箴 29:15)。私たちの心は地面のようなもので、放っておけば確実に雑草が生えてくる。

ということは、もし子どもを賢いしかたで育てたければ、子ども自身の願い通りにはさせないことである。からだの弱い人や盲目な人に接するときと同じように、子どもにかわって考えてやり、子どもにかわって判断してやり、子どもにかわって行動してやりなさい。しかし決して決して、子どもをその子自身の気まぐれな嗜好や性質にまかせることだけはしてはならない。伺いを立てるべきなのは、その子の好みや望みであってはならない。子どもは、からだにとって良いことが何かわからないのと同じくらい、心と魂にとって何が良いのかわかっていないのである。子どもの食べ物、飲み物、着る物などを子どもの好きに決めさせる親などいないであろう。では、子どもの心についても首尾一貫して同じように扱うがいい。子どもの気に入る道ではなく、聖書に従った正しい道へと教育してやりなさい。

キリスト者の家庭教育におけるこの第一原則について心を堅く定めることができない人は、これ以上先を読んでも無意味である。わがままこそ、子どもの心から真っ先に生じてくるものの1つである。そしてそれに抵抗することこそ、あなたがたの最初の一步でなくてはならない。

2. 子どもを教育するには、ありったけの優しさと愛情と忍耐を尽くしなさい。

これは子どもを甘やかせということではない。子どもには、あなたがたが彼らを愛していることを見せてやりなさい、ということである。

愛こそあなたがたの全行動を貫く銀の糸たるべきである。親切で、心広く、穏やかで、つまらぬことをとがめだてせず、辛

抱強くて、同情深く、子どもっぽい悩みにも喜んで耳を傾け、子どもっぽい喜びにも身を乗り出して没入する態度----こうした絆を結んでいてこそ、人は子どもにやすやすと云うことを聞かせることができるのであり、こうした道しるべに従っていてこそ、子どもの心に通ずる道を見出せるのである。

成人でも、よほど奇特な人でもない限り、優しく導かれるより追い立てられる方が好きだなどという者はいない。だれでも、強制させられれば向かっ腹を立てるものである。私たちは、無理強いさせられるということだけで態度を硬化させ、強情になってしまう。私たちは調練師のもとにある若馬のようなもので、優しく扱われれば簡単に云うことを聞くようになり、しだいに細糸でも導けるようになるが、荒々しく乱暴に扱えば、御せるようになるまで何か月もかかる。

さて子どもたちの心も、本質的には大人とほとんど変わるところはない。何のゆとりもなしに厳しく彼らに接すれば、その心を凍てつかせ、反感をいだかせてしまう。彼らの心は閉ざされ、どれほど苦勞しても扉を見出せなくなる。しかし、いったんこちらが子どもたちへの愛に満ちていることをわからせさえするなら----つまり、こちらが本当に彼らを幸せにしてやりたい、彼らに良くしてやりたいと願っていることを納得させさえするなら----、また、たとえ彼らを罰するとしても、それは彼らのためになされたことであり、あたかも自分の胸に傷をつけ血を餌にして雛に与えるというペリカンのように、わが身を犠牲にしても彼らの魂を養いたいのだということをつたえさせるなら----、私は云う。彼らはたちどころに、こちらに心を全くゆだねるであろう。云うことを聞いてほしければ、優しく親切な態度で彼らの心を勝ち取らなくてはならない。

そして理性的に考えれば、こうしたことは当然であるとわかるはずである。子どもたちは弱く、かよわい生き物である。そうした者らには、忍耐と思いやりのある扱いが必要である。私たちは精密機械を扱うときのように、デリカシーをもって彼らを扱わなくてはならない。さもないと手荒にいじくり回すことによって善よりも悪をなすことになるからである。彼らは芽吹きだした植物のようであって、ていねいな水やりが必要である。頻繁に、しかし一回の量は少なく。

私たちは一度に何もかもを期待してはならない。子どもたちがどういう者であるかを忘れないようにし、彼らに耐えられるだけのことを教えていかななくてはならない。彼らの心は金属の塊のようであって、一気に鍛造してすぐ使うのではなく、ハンマーの一打ち一打ちによって少しずつ形を整えていくべきである。彼らの理解力は細手の瓶にも似て、知識の葡萄酒を少量ずつ注いでいかなければ、その大半はこぼれて失われてしまう。「規則に規則、戒めに戒め、ここに少し、あそこに少し」、これが鉄則である。砥石で刃を研ぐには、ゆっくりと何度も刃をあてなくてはならない。まことに子どもの教育には忍耐が必要である。しかし忍耐なしには何事も行なうことはできない。

他のいかなる物もこの暖かい心と愛の代わりにはならない。ある牧師がイエスのうちにある真理を明確に、力強く、論駁の余地ないほど完璧に語れるとしても、もし愛によって語るのとなれば、救われる人はまずいないであろう。同じようにあなたがたも、自分の子どもたちの前にその義務を示さなくてはならない----命令し、恐れさせ、罰し、事を分けて論じなくてはならない----が、もしもそこに愛情が欠けているとしたら、あなたがたの労苦はことごとく無駄な骨折りとなるであろう。

愛は、子育てに成功するための大きな秘訣である。怒って厳しく当たれば子どもを恐れさせることはできるかもしれないが、心から納得させはしない。また、子どもの前でしばしばかんしゃくを爆発させる親は、じきに子どもの尊敬を失うであろう。息子に向かって、サウルがヨナタンに語ったように語る父親は(Iサム 20:30)、息子を自分の意に添わせる力を全く失って当然である。

それゆえ、子どもの愛情を捕えて離さないよう懸命に努力しなさい。子どもが親を恐れてびくびくしているとしたら危険な徴候である。親子の間の冷淡さやよそよそしさほどひどいものはないが、こうしたものは恐れとともに持ち込まれてくるのである。恐れは、うちとけた態度を葬り去り、隠し事を持たせ、あまたの偽善の種を蒔き、多くの嘘へと導く。コロサイ人へ向けた使徒の言葉には、非常に深遠な真実がある。「父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです」(コロ3:21)。ここにふくまれている忠言を見落とさないようにしようではないか。

3. 子どもを教育するには、わが子の将来が自分にかかっているのだという堅い信念を常に持ち続けなさい。

この世に働く力の中で最も強いのは、恵みの原理である。年老いた罪人に救いの恵みが訪れるとき、どれほど革命的な影響がもたらされるか見るがよい。それがいかにサタンの要塞を覆滅し、いかに山々をならし谷々を埋め立てることが。いかにねじ曲がったものを真っ直ぐにし、いかに人を新しく造りかえることが。まことに、恵みに不可能なことは1つもない。

天性もまた非常に強力である。生来の性質がいかに神の国の事がらに逆らいあらがうことか。いかに私たちがより聖くなるうと試みるたびに反抗することか。いかに私たちの内側に、人生最後の時に至るまで、絶えざる戦いをしかけ続けることか。確かに天性は実に強大な力である。

しかし天性と恵みを別にすれば、疑いもなく、教育ほど強いものはない。語弊を恐れずに云えば、神の摂理のもとで幼少期に身についた習慣は、全人格を決めてしまうのである。私たちの人となりは、私たちがどう教育されたかにかかっている。私たちの性格は、幼児期にどのような鑄型にはめられたかで定まる*2。

私たちの人格は、幼少期どのような人々によって育てられたかによって大きく左右される。私たちが彼らから受け継ぐ個性、趣味、心の傾向は、多かれ少なかれ私たちに生涯つきまとう。私たちは乳母や母親の言葉を聞いて、ほぼ無意識のうちに話し方を覚えてしまうが、それと同時に、彼女たちの物腰や態度や考え方も、ある程度身につけるはずである。私たちが幼児期に受けた印象がいかに多くを負っているか、また現在の私たちの性格のいかに多くが幼少期に周囲にいた人々の蒔いた種子までさかのぼれるか、これは、時間さえ経てばだれの目にも明らかになるのではなからうか。非常な学識者であった英国人ロック氏は、こうも云っている。「私たちの会おう人はみな、その人となりの十分の九を、良きにつけ悪きにつけ、有用なものであれ無用なものであれ、教育の成果に負っているのである」、と。

そしてこれはみな、神のあわれみ深いお取りはからいの一例にほかならない。神は子どもたちに柔らかい粘土のような、与えられた印象をそのまま受け入れる心を与えておられる。人生の出発点にあたって、あなたが彼らに告げることが何でも信じ、あなたが彼らに助言することを素直に受け取り、他のだれよりもあなたの言葉に信頼するような心持ちを与えておられる。つまり神は親であるあなたに、子どものためになることをしてやれる黄金の機会を与えておられるのである。その機会をないがしろにしたり、棒に振ったりしないように注意しなさい。いったん取りのがしたら、それは永遠に戻ってこないのである。

よく注意して、ある人々のような悲惨な迷妄に陥らないようにしなさい。そうした考えによると、親は子どものために何もできないのだから、ただ子どもを放任しておき、恵みをじっと待つだけでなくてはならないという。このような親がわが子のために抱いている願いは、パラムの願いと軌を一にしている。彼らは、わが子が正しい人が死ぬように死んでほしいと願うが、正しい人として生かすためには指一本動かさないのである[民23:10]。彼らは多くを望むが、何も得られない。そして悪魔

が喜ぶのはそうした屁理屈である。悪魔は怠惰を大目に見たり、恵みの手段をないがしろにさせたりするようなことなら、何であっても喜ぶのである。

親の力では子どもを回心させられないということは私も知っている。新しく生まれる者らは、人の意欲によってではなく、神によって生まれる [ヨハ 1:13]。そのことも知っている。しかし私は、神がはっきりと「若者をその行く道にふさわしく教育せよ」、と語っておられること、また神が命令されるときには必ずそれを実行するための恵みをお与えになることをも知っているのである。また私たちの義務が、突っ立って論議することではなく、行って従うことにあることも知っているのである。立ち上がって行動する中でこそ、神は私たちに会ってくださる。従順の道こそ、神が祝福を与えてくださる道である。私たちは、カナの婚礼で水がめを水で満たすように主から命ぜられたしもべらのようにしさえすればよい。その後で水を葡萄酒に変えることは安心して主におゆだねしてよいのである。

4. 子育てにおいて何よりも考えなくてはならないのは、子どもの魂である。このことを絶えず肝に銘じつつ教育しなさい。

疑いもなく、幼いわが子は目の中に入れても痛くないほど可愛いであろう。しかし本当に子どもを愛しているというなら、彼らの魂についてしばしば考えなさい。彼らの永遠の利益とはかりにかけるほど重い利益があってはならない。彼らのいかなる部分をも、不死の部分とひきかえにするほど尊んではならない。この世はどれほど華やかに見えても、いつかは過ぎ去る。丘々は溶け去り、天は巻物のように巻き取られ、太陽は輝くことをやめる。しかし、あなたが愛してやまないこの小さな者らのうちに宿る霊は、それらの万象が失せ去った後も存在し続けるのであり、それが至福のうちの永世となるか悲惨のうちの永世となるかは、(人間的に云えば)あなたしだいなのである。

これこそ、子どものため何をするにも常に念頭に置いておくべきことである。子どもについてどんな処置をとるときも、どんな計画や予定を立てるときも、どんな取り決めをするときも、「これは彼らの魂にどのように影響するだろうか」、という重大きわまりない問いを忘れてはならない。

魂を愛することこそ、本当に愛するということである。わが子を猫かわいがりし、ほしがるものはみな与え、甘やかし放題にする、---それも、この世にしか良いものはなく、この人生でしか幸福が得られないかのようにそうする、---これは真の愛ではなく、残虐行為である。これはわが子をけだもの扱いするのと変わらない。動物なら、望むべきものはこの世にしかなく、死後に期待すべきものは何もないであろう。しかし人間の子どもの場合そうするのは、物心がつくが早いか教え込まなくてはならない重大な真理---人生の主たる目的は魂の救いにあるということ---を故意に押し隠すことである。

真のキリスト者は、わが子を天国へ向けて教育しようと思うのであれば、決して流行の奴隷となってはならない。世のならいだからというだけで、何かをしても大丈夫だと思ってはならない。どこの家でもそうしているからというだけで右ならえの教育をしたり、どこの子も読んでいるからというだけで疑わしい種類の本を読ませたり、今流行しているからというだけであやしげな習慣を身につけさせたりしてはならない。キリスト者の子育ては、常にわが子の魂に目を配りつつ行なわれなくてはならない。はたから子育てが風変わりだとか、ずれているとか云われても恥じてはならない。それが何だというのか？ 時はうつろい、この世の流行はすたれる。わが子を地上へ向けてではなく天国へ向けて教育してきた人、---人間に向けてではなく神へ向けて教育してきた人、---そのような人こそ、最後の最後で賢い人と呼ばれるのである。

5. 子どもには聖書の知識を身につけさせなさい。

子どもが聖書を受容するように強制することはできない。それは私も認める。ご聖霊のほか何者も、みことばを喜ぶ心を与えることはできない。しかし、子どもを聖書に親しませることはできるし、このほむべき書物に親しませるのに早すぎるとか、親しませすぎるとかということはない。

聖書の徹底的な知識は、信仰を少しでも明晰に把握するためには決して欠かせない土台である。たいていの場合、聖書の手ほどきを十分受けた人がふらついたたり、新しい教えの風に吹き回されたりすることはめったにない。聖書の知識を最優先にしていないような教育方針は危険であり、不健全である。

今はこの点で注意深くなくてはならない時代である。悪魔は至る所に出没し、誤った考えが巷にあふれているからである。キリスト者の中には、イエス・キリストにのみふさわしい栄誉を教会に与えている人々がいる。別の人々は、聖礼典を救い主にまつりあげ、永遠のいのちへの切符としている。さらに別の人々は、教理問答を聖書以上に尊ぶか、真理の聖書のかわりに、ちやちで内容貧困な物語本で子どもたちの心を満たしている。しかし本当に子どもを愛しているなら、その魂の訓育においては、混じりけのない聖書を何よりも重んじ、その他の本は聖書以下の、補助的なものとみなすべきである。

教理問答に精通させるよりは、聖書に精通した子にさせなさい。事実、それこそ神が尊ばれる訓育である。詩篇作者は神についてこう語っている。「あなたは、ご自分のすべての御名のゆえに、あなたのみことばを高く上げられた」（詩 138:2）。そして神は、人々の間でみことばを高く上げようとする人々に、特別な祝福をお与えになると私は思う。

子どもが聖書を敬虔な態度で読むようにさせなさい。人間の言葉ではなく、事実通りに神のことばであるとみなさせなさい。---ご聖霊によって書かれた、すべてが真理で、すべてが有益な書物であると、また私たちに知恵を与えてキリスト・イエスに対する信仰による救いを受けさせることのできる書物であるとみなさせなさい [I テサ 2:13; II テモ 3:15]。

また聖書を規則正しく読むようにさせなさい。子どもをよく教えて、聖書を彼らの魂の日々の糧---魂の日々の健康を支えるため不可欠なもの---であるとみなさせなさい。むろん親がどんなに努力してもこれを単なる形式以上のものにはできない。それは私にもわかっている。しかし単なる形式が、間接的にどれほど多くの罪をくいとめるか、だれにわかろう。

また聖書のすべての部分を読むようにさせなさい。どんな教理も、子どもの前に持ち出すのをためらうことはない。子どもにはキリスト教の主要教理が理解できないのではないかなどと思う必要はない。子どもたちは、ともすれば私たちが設けがちな限度をはるかに越えて聖書を理解するものである。

彼らに罪について、その咎、その結果、その力、その下劣さ、卑しさについて教えてみるがいい。その幾分かは理解できていることがわかるであろう。

彼らに主イエス・キリストについて、また私たちの救いのためになされた主のみわざについて教えてみるがいい。その贖い、十字架、血潮、犠牲、とりなしについて教えてみるがいい。こうしたことすべてについて、多少とも子どもにもわかる部分があることに気づくであろう。

彼らに人の心におけるご聖霊のみわざについて教えてみるがいい。ご聖霊がいかんにかに人の心を変えて新しく生まれさせ、聖なるものとし、きよめてくださるかを教えてみるがいい。子どもたちも、ある程度まではこれらについて把握できることがわかるであろう。つまり、幼子といえども栄光の福音の長さや広さについて、私たちの想像をはるかに越えて理解できるのではないかと私は思う。大人の考える以上に彼らは、こうした事がらを理解するものである*3。

彼らの心を聖書で満たしなさい。みことばを彼らのうちに豊かに住ませなさい [コロ 3.16]。彼らに聖書を与えなさい。聖書全巻を与えなさい。彼らが幼少のうちからそうしなさい。

6. 子どもには祈りの習慣を身につけさせなさい。

祈りは真の信仰の命を支える息吹きそのものである。それは人が新しく生まれたという最初の証拠の1つである。アナニヤを遣わされた日に主は、「見よ」とサウロについて語っておられる。「見よ。彼は祈っている」(使 9:11 <英欽定訳>)。

祈りは、主の民を特徴づける顕著なしるしであった。主の民と世との分離が始まった日について、聖書にはこう書かれている。「そのとき、人々は主の御名によって祈ることを始めた」(創 4:26)。

祈りは今も、真のキリスト者全員の特質である。彼らが祈るのは、自分の望み、感情、願い、恐れを神に申し上げるためであり、その言葉は心からのものである。名ばかりのキリスト者であっても、祈りをおうむがえしに繰り返すことはできるかもしれない。立派な祈りすらよどみなく唱えられるかもしれない。しかし彼らは、それ以上一步も先には行かないのである。

祈りは人の魂の転回点である。人が祈るため膝まづくようにならない限り、いかなる霊的指導も無益であり、いかなる働きもむなし。そのように変わらない人については何の希望も持てない。

祈りは人の霊的幸福の偉大な秘訣の1つである。密室で神と大いに交わっている人の魂は、雨の後の草のように生き生きと成長する。神との交わりをほとんど持たない場合、すべてが行き詰まり、魂は全く生気を失ってしまうであろう。ぐんぐん成長しているキリスト者、いつも前向きなキリスト者、力にあふれるキリスト者、霊的に恵まれているキリスト者は、みな例外なく常々自分の主と語り合っている人のはずである。そういう人は多くを求めているからこそ、多くを得ているのである。イエスに何もかも申し上げているからこそ、どう身を処せばよいかいつでもわかるのである。

祈りは、神が私たちの手にお授けになった最も強大な道具である。あらゆる困難に際して使える最上の武器であり、いかなる問題にあたってもしっかりとした解決をもたらす治療薬である。祈りは、神の数々の約束の宝庫を開く鍵であり、苦境にあるとき恵みと助けを引き出す手である。いかなる必要があるときも、神が私たちに吹き鳴らすよう命じておられる銀のトランペットであり、母が愛児の声を聞き逃さないように、神が常に聞きつけてくださると約束なさった叫びである。

祈りは人が神のもとに向かうにあたって用いることのできる最も単純な手段である。これはだれでも簡単に用いることのできるものである。----病人、老人、弱者、身体麻痺者、盲人、貧者、無学者----だれにでも祈ることはできる。記憶力のなさや、学問のなさ、書物のなさや学識のなさを申し立てても何にもならない。自分の魂の状態を語るの口がある限り、祈ることはできるし、祈るべきである。「あなたがたのものにならないのは、あなたがたが願わないからです」との言葉は(ヤコ 4:2)は、最後の審判の日、多くの人々にとって恐るべき断罪理由となるであろう。

私は子どもを持つ方々に云いたい。もし本当に子どもを愛しているなら、あらん限りの手を尽くして祈りの習慣を身につけさせなさい。どのように祈り出せばよいか手本を示してやりなさい。何について祈るべきか教えてやりなさい。うむことなく祈り続けられるよう励ましてやりなさい。彼らの祈りがなげやりになったり、だれてきたら、注意してやりなさい。少なくとも、彼らが主の御名を一生呼び求めないようなことがあったとしても、それがあなたのせいではないようにしておきなさい。

覚えておきなさい。これこそキリスト教教育において子どもが踏み出せる最初の一步である。子どもを母の隣でひざまづかせることは、字が読めるようになるずっと前からできる。母の口移しによる簡単な言葉で、祈りと賛美を唱えさせることは、ごく幼少のうちからできる。また、何をすることも最初の一步は常に最も重要であるが、それと同じく、あなたの子どもが祈るとき態度もまた非常に重要であり、親が細心の注意を払わなくてはならない点である。この点にどれほど多くがかかっているか、ほとんどの人は全く気づいていないように見える。子どもの祈りが口早で、おざなりで、ぞんざいなものになってきたら要注意である。親は、わが子がどう祈るかを使用人や乳母に監督させてまかせきりにしたり、親の目の届かない所で子どもがどんな祈りをしているかについて無関心になったりしないよう用心しなさい。わが子の毎日の生活において最も重要な部分であるこの一事を他人にゆだねて何とも思わないような母親をほめるわけにはいかない。あなた自身が目を光らせ、あなた自身の手で身につけさせるべき習慣が1つあるとすれば、それは疑いもなく祈りの習慣以外にないであろう。事実、もしあなたがわが子の祈るのを一度も自分で聞こうとしないなら、あなたは大いに非難されてしかるべきである。そんな親は、ヨブ記で述べられている鳥に毛が生えたような知性しかないのである。「だちょうは卵を土に置き去りにし、これを砂で暖めさせ、足がそれをつぶすことも、野の獣がこれを踏みつけることも忘れている。だちょうは自分の子を自分のものでないかのように荒く扱い、その産みの苦しみがむだになることも気にしない」(ヨブ 39:14-16)。

祈りは、ありとあらゆる習慣の中で、最も長く記憶に残るものである。多くの白髪の老人が、その幼少時に自分がどのように母親から祈らされたかを語ることができるであろう。それ以外のことは記憶から抜け落ちていくかもしれない。どんな教会に連れていかれたか、どんな牧師の説教を聞いたか、どんな仲間と遊んでいたか、---これらすべては記憶から消え去り、何の痕跡も残していないかもしれない。しかし、幼いころにどんな祈りをしていたかという点に限って言えば、事情は全く異なることが多い。どんな所でひざまづいたか、何について祈るように教えられたか、ことによると自分が祈っている間母親がどのようにそれを見守っていたかさえ、告げることのできる老人が少なくない。彼らの心の眼には、それが昨日のことででもあるかのように新鮮に思い出されるであろう。

私は読者の方々に云いたい。もし本当にわが子を愛しているのなら、毎日敬虔に祈るという習慣の種を蒔く時期を決してあだに過ぎ去らせてはならない。子どもに何か1つしつけるというのであれば、少なくとも祈りの習慣を身につけるようしつけなさい。

7. 子どもには、規則正しく真面目に礼拝に出席する習慣を身につけさせなさい。

子どもたちに教えなさい。神の家に集い、会衆と声を合わせて祈りを唱えることが、いかに義務であり特権であるかを。また、主の民が集まる所にはどこにでも主イエスが特別のしかたで臨在しておられ、自分から欠席する者は、使徒トマスのように祝福を取り逃がすのだということを。みことばの説き明かしを聞くことがいかに重要であるか、またそれが人の魂を回心させ、きよめ、確立させるために神がお定めになった手段であることを。使徒パウロが私たちに向かって、「ある人々のように、いっしょに集まることをやめたり」せず、むしろ互いに戒め合い、互いに奮起しあい、かの日が近づいているのを見てもすま

すそうせよ、といかに命じているかを（ヘブ 10:25）。

私が教会の中で見ていて悲しく思うのは、主の晩餐にあずかるために進み出てくるのが老人だけで、青年男女は全員背を向けて去っていくという光景である。しかし、それ以上に悲しいのは、日曜学校にやって来るため礼拝出席せざるをえない者らをのぞいて、教会の中に子どもがひとりも見られないという光景である。決してこうした事態の責めがあなたに帰されないようにしなさい。どんな教区であれ、学校に通ってくる子たち以外に、大勢の男の子や女の子がいる。その子たちの親であり友人であるあなたがたは、彼らがあなたがたと連れ立って教会に来るようにすべきである。

子どもが、なんだかんだと教会に来ない云い訳をつけながら大きくなっていくようなことがないようにしなさい。はっきり彼らに云って聞かせることである。この屋根の下に住んでいる限り、健康な者は全員、主の日には主の家を尊ぶのがこの家のしきたりである、と。また、安息日を破る者は、自分自身の魂を殺す者であるとみなす、と。

それとともに、できる限り、子どもにはあなたとともに教会に行くようにさせ、教会ではあなたのそばに座らせなさい。教会に行くということと、教会の中で行儀よくしているということは別物である。実際、あなた自身の目が届くところにいさせることにまさせて、子どもを行儀よくさせておくことはできない。

子どもはちょっとしたことですぐ気をそらされ、注意が散漫になりがちである。だから、それを防ぐためにできることは何でもすべきである。私は、子どもが自分たちだけで教会に来るのは好まない。---彼らはしばしば道の途中で悪い仲間とつきあい、他のどんな平日にもまさせて主の日に悪事を覚えこむのである。それと同じく私は、教会の中に、いわゆる「年少者コーナー」があるのも好きではない。彼らはしばしばそこで、礼拝に集中せず、礼拝を軽んずる習慣を身につけてしまい、そうした習慣を払拭するには何年も何年もかかる。へたをすれば一生身についたままである。私が見たいのは、家族そろって、老いも若きも、男も女も、大人も子どもも、一家全員が並んで一箇所に座り、礼拝を守る姿である。

しかし世の中には、子どもを礼拝に出させても、意味がわからないのだから無駄だという者がある。

そんな理屈には耳を貸さないでほしい。そんな教理は旧約聖書のどこにも書いていない。モーセがバロの前に出たとき（出 10:9）、彼はこう云うのである。「私たちは若い者や年寄りも連れて行きます。息子や娘も.....連れて行きます。私たちは主の祭りをするのですから」。ヨシユアが律法を読んでいるところには（ヨシ 8:35）、こう書いてあるのである。「ヨシユアがイスラエルの全集会、および女と子どもたち、ならびに彼らの間に来る在留異国人の前で読み上げなかったことばは、一つもなかった」。出 34:23 にはこう書いてある。「年に三度、男子 [男の子どもたち <英欽定訳>] はみな、イスラエルの神、主、主の前に出なければならない」。また新約聖書を開くと、そこで言及されている子どもたちは、旧約時代と全く同じく、公同の礼拝に参加していることがわかるのである。パウロがツロの弟子たちと最後の別れを交わしている場面には、こう書いてある（使 21:5）。「彼らはみな、妻や子どももいっしょに、町はずれまで私たちを送って来た。そして、ともに海岸にひざまずいて祈っ.....た」。

幼少期のサムエルは、本当の意味で主を知る少し前から、主に仕えていたように見受けられる。「サムエルはまだ、主を知らず、主のことばもまだ、彼に示されていなかった」（Iサム 3:7）。使徒たち自身、私たちの主が云われたことのすべてを、語られたとき即座に理解したとは思えない。「初め、弟子たちにはこれらのことがわからなかった。しかし、イエスが栄光を受けられてから、これらのことがイエスについて書かれたことであって、人々がそのとおりにイエスに対して行なったことを、

彼らは思い出した」(ヨハ 12:16)。

子どもを持つ方々は、こうした数々の例で心を励ましていただきたい。あなたの子どもたちが今、礼拝の尊さを完全には理解していないからといって、落胆してはならない。ただ規則正しく出席する習慣を身につけさせることだけを考えなさい。礼拝出席が、高貴で、聖く、厳粛な義務であるということを、肝に銘じさせなさい。そうすれば、あなたがそうしてくれたことで、彼らがあなたに感謝する日がほぼ間違いなくやって来るであろう。

8. 子どもには信仰の習慣を身につけさせなさい。

これは、子どもは、親の言葉を信ずるようにしつけるべきだということである。努めて子どもには、あなたの判断を信頼させ、あなたの考えの方が自分の考えよりも正しくて重要であると考えさせるべきである。子どもたちには、何か彼らにとって悪いことだとあなたが云うとき、それは悪いことに違いない、と、また何か彼らにとって良いことだとあなたが云うとき、それは良いことに違いない、と一も二もなく受け入れさせなくてはならない。一言で云えば、親は自分よりもよく物を知っているのだから、だまって親の言葉を信用しておけば間違いはない、という考えになじませるべきである。今はわからないことも、おそらくやがてわかるようになるのだ。親が命ずることにはみな、それ相応の理由があるのだ、という思いを植えつけなくてはならない。

実際、真に信仰深い精神は、云いつくしがたいほど幸いなものである。というよりも、不信仰こそ、世に測り知れないほどの悲惨さをもたらしてきたものである。不信仰によってエバは禁断の木の實を食べた。---彼女は、「あなたは必ず死ぬ」、という神のことばの正しさを疑ったからである。不信仰によって古の世界はノアの警告を拒否し、罪の中で滅んだ。不信仰によってイスラエルは荒野に閉じこめられた。---不信仰こそ、彼らが約束の地に入るのをはばんでいた垣根であった。不信仰によってユダヤ人は栄光の主を十字架につけた。---彼らは、毎日読み聞かされていたはずのモーセや預言者らの声を信じなかったのである。そして不信仰は、まさに今この時に至るまで人の心を牛耳っている罪である。---神の約束に対する不信仰---神の脅かしに対する不信仰---自分の罪深さに対する不信仰---自分の危険に対する不信仰---自分の高慢と悪しき心に反する、あらゆることに対する不信仰。私は読者に云いたい。いくらよく子どもをしつけようとしても、素直に信ずる習慣---親の言葉を信じ、親が云うことに間違いがあるはずないと信ずる心---を身につけさせなければ、ほとんど何の役にも立たない、と。

ある人々の説によれば、子どもには、彼らの理解できないことは何も命じてはならない、という。子どもに何かさせたいことがあれば、必ずその理由を説明してやるべきである、と。私は厳粛に警告しておく。こんな考えを信じてはならない。はっきり云えば、これは不健全な、腐った原則だと思う。もちろん、親のすることなすことをみな秘密めかしておくのは馬鹿げたことである。子どもたちに説明してやり、それが筋の通った賢いことであるとわからせた方が良いことはたくさんある。しかし、子どもには何1つ無条件で信じさせてはならないとか、たとえその子にどれほど弱く不完全な理解力しかなくとも、事のいわれや因縁を完全に明瞭にしてからでなければどんなこともさせてはならない、といった考えで子育てをすること、---これは実際恐るべき間違いであり、子どもたちの心に最悪の影響を及ぼすであろう。

そうしたければ、時には子どもと論じ合うのもいい。しかし(本当に子どもを愛しているなら)、決して子どもに忘れさせてはならないことがある。結局自分は子どもでしかないのだ、ということである。---自分には子どもの考え方しかできず、子どもの理解力しかなく、それゆえ、あらゆることの理由をいっぺんに知ることはできないのだ、ということである。

子どもにはイサクの模範を示してやるがいい。アブラハムがイサクを連れてモリヤの山に行き、彼をいけにえとしてささげようとした日（創 22）、イサクは父に1つ質問をした。「全焼のいけにえのための羊は、どこにあるのですか」、と。だが、返ってきたのは、「神ご自身が羊を備えてくださるのだ」、という答えしかなかった。どのようにして、どこで、どこから、どんなしかたで、何を用いて羊が備えられるのか---イサクには何も告げられなかった。しかし、その答えだけで十分であった。イサクはそれで大丈夫だと思った。父がそう云ったからである。それでイサクは満足したのである。

子どもには告げてやるがいい。だれでも最初は一から学ばなくてはならないのだ、と。---いかなる種類の知識にも、まずは覚えなくてはならないアルファベットがある。---世界一の駿馬といえども、一度は馴らされる必要があった。---やがて今訓練されていることがどんなに大切なことであるか、わかる日が来るだろう、と。しかし、その日が来るまでは、親が正しいと云ったら、子どもはそれを受け入れなくてはならない。---親を信じなくてはならず、それで満足しなくてはならない。

子どもを持つ方に私は云いたい。子育ての肝となることが何か1つあるとしたら、それはこの点である。あなたがわが子に対していただいている情愛にかけて、私は命ずる。あらゆる手段を用いて、子どもには信仰の習慣を身につけさせなさい。

9. 子どもには服従の習慣を身につけさせなさい。

これは、どれほどの労力を費やしてもかけがえのない目標である。これほど私たちの人生に大きな影響を及ぼす習慣はないのではないと思う。子どもを持つ方に云うが、たとえどれほど面倒な事態になろうと、またどれほど子どもの涙をふりしぼらせることになろうと、子どもをあなたに従わせる決心をしなさい。何の反問も、屁理屈も、云い争いも、引き延ばしも、口答えも許してはならない。あなたが子どもに何か命じたら、何がどうあろうと従わなくてはならないということを、子どもの頭にたたきこみなさい。

服従こそ唯一の現実である。それは目に見える信仰であり、働く信仰であり、具体化した信仰である。それは主の民の中で、だれが真の弟子かを見分けさせるものである。「わたしがあなたがたに命じることをあなたがたが行なうなら、あなたがたはわたしの友です」（ヨハ 15:14）。よくしつけられた子どもたちのしるしは、親から命じられたら何でも行なうということではなくてはならない。実際、父と母の云いつけに子どもたちが朗らかに、喜んで、すぐさま従わないとしたら、第五戒で命じられている「敬い」はどこにあるというのか？

幼少期から親に服従することは、聖書の至る所で認められている。アブラハムのほまれは、自分の家族を訓練しただけでなく、「彼がその子らと、彼の後の家族とに命じ」たことであった（創 18:19）。主イエス・キリストご自身についてもこう云われている。「彼は若く、マリヤとヨセフに仕えられた」*（ルカ 2:51）。ヨセフが父の命令に、いかに黙って従ったかを見るがいい（創 37:13）。イザヤがいかに、「若い者が年寄りに向かって高ぶ」ることを悪と語っていることか（イザ 3:5）。見よ。いかにパウロが、親への不服従を終わりの日の悪いしるしの1つに挙げていることか（II テモ 3:2）。いかにパウロが、服従を要求するというこの恵みを、キリスト教の教役者を飾るべき資質の1つとして、わざわざ挙げていることか。「監督はこういう人でなければなりません。すなわち、.....自分の家庭をよく治め、十分な威厳をもって子どもを従わせている人です」[I テモ 3:4]。同じように、長老として立つ者に求められている条件は、「その子どもが不品行を責められたり、反抗的であったりしない」ことであった（テト 1:6）。

私は子どもを持つ方に云いたい。あなたはわが子が幸せになるのを見たいだろうか？ ならば子どもをよくしつけて、云いつけられたことには従い、命ぜられた通り行なうようにさせなさい。嘘ではない。私たちは何もかもから自由に生きようには造られていない。---そのようなことに私たちは適していない。キリストが与えてくださる自由にすら、負うべきくびきがある [マタ 11:29]。キリスト者は「主キリストに仕えている」のである (コロ 3:24)。この世界は私たちがみな支配者となるためにあるのではないし、長上者いかに従うかを学ぶまで、私たちは決してふさわしい立場にあるとは云えない。こうしたことを子どもに教えるのに早すぎることはない。子どもには、その幼いうちから人に従うことを教えなさい。さもないと彼らは一生の間神に対して苛立って暮らすことになり、神の支配から独立しようという、あだな考えで自らをすりつぶすであろう。

今この言葉を読んでいる人に私は云いたい。この助言は現在この上もなく必要なものである。少し見渡せばわかる通り、最近の親たちの多くは、子どもに判断力がつくはるか以前から、子どもが自分で選択したり考えたりするがままにさせている。彼らは子どもが親に服従しなくとも、何ら非難に当たらないかのように、子どもの弁護をしさえする。しかし私の見るところ、何でも子どもの云うなりになっている親、何でも自分の思い通りにしている子どもの姿ほど痛ましい光景はない。---痛ましいというのは、神のお定めになった物事の秩序が逆転させられ、あべこべになっているからである。---痛ましいというのは、その子どもの性格の行き着く先が見えているからである。すなわち、わがまま、思い上がり、うぬぼれである。幼少のころから地上の父親に逆らい放題に育てられた人が、成人して後、天にいます御父に従うことを拒否するとしても、何の不思議もない。

子どもを持つ方々に私は云いたい。もしわが子を愛しているのなら、親への服従ということ、いついかなるときも絶対的な原則として子どもに示していなさい。

10. 子どもには、常に真実を語る習慣を身につけさせなさい。

真実を語ることは、私たちが日頃思い込んでいるよりもずっと世にまれなものである。「すべての真実、真実以外の何物でもない真実」、という黄金の原則を心にとめておくことは、多くの人にとって益するところ大であろう。嘘をつくこと、ごまかすことは、古の昔からある罪である。悪魔がそれらの父であった。---彼は大胆な嘘でエバを欺いた。そして墮落以後、それはエバの全子孫が警戒しなくてはならない罪となっている。

この世にどれだけ偽りと欺きが満ちているか、少しでも考えてみるがいい。何とはなはだしい誇張があることか。何と多くの尾鱗が真実につけ加えられることか。何と多くのことが、話し手の利害に反する場合は省略されることか。何と私たちの周囲には、無条件でその言葉を信頼できるような人々が少ないことか。まことに古代のペルシャ人たちは賢明であった。彼らが子弟教育において眼目としたことの1つは、子どもたちに真実を語ることを学ばせるという点であった。だが、そもそもそのような点を挙げる必要があるという自体、人間の生まれながらの罪深さについての、何と恐るべき証拠であろう！

旧約聖書において、神がいかにしばしば真実の神と語られているかに注意してほしい。真実は、私たちが弁明すべき相手たるお方のご性質のうちの主要な特徴として特に示されていると思われる。神は嘘と偽善を忌み嫌われる。このことを常に子どもたちの心に対して示し続けておくがいい。いついかなるときも、彼らに対して強く主張することである。真実以下のことはみな嘘である、と。また、云い逃れや弁解や誇張はことごとく偽りの始まりであり、避けなくてはならない、と。いかなる状況においても率直であり、どれほどの代価を払うことになっても真実を語るように彼らを励ましてやるがいい。

私がこの主題にあなたの注意を引いているのは、単にあなたの子どもたちのこの世における人格形成のためばかりではない。

---その点についても、いくらでも詳しく語っていけると思うが---私がこれをあなたに勧めるのは、あなた自身の慰めのため、また子どもたちを相手にするあらゆる場面で、あなたの助けとするためである。どんなときにもわが子の言葉を信じられるということ、これは実に力強い助けであることにあなたは気づくであろう。それは、不幸にも子どもたちの間で非常にはびこることのある、あの隠し立ての習慣を防ぐのに大いに効果があるであろう。あけっぴろげな率直さは、この件で親がどのように子どもを扱ってきたかに非常に左右されるものである。

11. 子どもには、常に時間を有効に用いる習慣を身につけさせなさい。

怠惰は悪魔の最良の友である。それは、悪魔に私たちが害させる機会を与える最も確実な道にほかならない。怠惰な精神は、あけっぴろげの扉のようなもので、たとえ悪魔自身がそこから入り込まないとしても、彼が何か悪い考えを引き起こすものを私たちの魂の中に投げ込んでくることは確かである。

いかなる被造物も、怠惰に過ごすために造られてはいない。奉仕し、働くことこそ、神のあらゆる被造物に任せられた定めである。天の御使いたちは働いている。---彼らは主に仕える霊であり、常に主のみこころを行なっている。楽園におけるアダムには働きがあった。---彼はエデンの園を耕し、守るように任せられていた[創2:15]。贖われて栄光に入った聖徒らには働きがある。---「彼らは、昼も夜も絶え間なく」、彼らを買ってくださったお方の賛美と栄光を歌い続ける。そして人間も、弱く罪深い人間も、何かなすべきことがなくてはならない。さもないと、魂がたちまち不健全な状態に陥るであろう。私たちは、何かで自分の手をふさぎ、何かで思いを占めさせていなくてはならない。さもないと私たちは空想にふけることとなり、それがたちまち有害な思いをかきたて、悪を生じさせるであろう。

そして私たちにとって真実なことは、子どもたちにとっても真実である。まことに、何もすることがないという人間ほど悲しむべき者はない！ ユダヤ人は怠惰を積極的な罪であると考えた。彼らの戒律によれば、あらゆる人は自分の息子を、何か有益な職を手につけた者となるよう育てなくてはならなかった。---そして彼らは正しかった。彼らは人の心というものを、私たちの中のある人々よりも、はるかによく知っていたように見受けられる。

怠惰こそソドムをあのような町にしたものであった。「あなたの妹ソドムの不義はこうだった。彼女とその娘たちは高慢で、食物に飽き、安逸をむさぼ……った」（エゼ16:49）。怠惰こそダビデが、ウリヤの妻について犯したすさまじい罪に大きくかかわったものであった。---IIサム11によれば、ヨアブがアモン人との戦争に出かけていた間、「しかしダビデはエルサレムにとどまっていた」、と記されている。これが怠惰ではなからうか？ そして、まさにそのときに彼はバテシェバを見そめたのであり、---続いて私たちが読まされるのは、彼が途方もなく、みじめに墮落していく姿である。

まことに私の信ずるところ、思いつく限りの、ほぼどのような習慣にもまさせて、怠惰ほど多くの罪に導くものはない。怠惰こそ、多くの肉の行ないの母ではなからうか。---姦淫の母、不品行の母、酩酊の母、その他枚挙のいとまがないほど多くの暗闇のわざの母ではなからうか。あなた自身の良心で、私が真実を語っていないかどうか判断してほしい。怠惰に身をまかせるとはいないや、悪魔が扉を叩き、するりと入り込むのである。

そして、それも全く理の当然である。---この世で私たちの周囲にある、ありとあらゆるものが同じ教訓を教えているように思える。行き場のない水こそ、よどんで不潔になっていく水である。流れ続け、ほとばしり続ける水の流れは、常に澄んでいる。蒸気機関は絶えず動かしていないと、たちまち故障し始める。馬は毎日走らせなくてはならない。規則正しく運動させて

いる馬こそ、最も役に立つ馬である。私たちも、健やかで強壯な肉体を持ちたければ、運動しなくてはならない。年がら年中腰を落ち着けてじっとしているだけでは、そのうち体が悲鳴を上げはじめるであろう。魂もそれと全く同じである。絶えず活発に動き続ける精神は、悪魔にとっても撃ち落とすのが困難なのである。努めて常に心が何か有益な仕事で占められているようにしなさい。そうすれば、あなたの敵も毒薬を蒔く余地をなかなか見出せないであろう。

私はこのページを読む人に云いたい。どうかこうした事をあなたの子もたちの思いに植えつけてほしい。時間の価値を彼らに教え、時間を有益に用いる習慣が彼らの身につくように努力しなさい。私が胸を痛めるのは、子どもたちが何であれ手持ちの仕事に精を出さず、のらくらしている姿である。私は子どもたちには活動的で、勤勉で、自分のしていることに一心に打ちこむ子どもであってほしいと思う。勉強しなくてはならないときには一心に勉強する子ども、遊びに行くときには遊びにも一心に打ちこむ子どもであってほしいと思う。

それゆえ、もし子どもを本当に愛しているというのなら、怠惰をあなたの家庭における敵とすることである。

12. 子どもは甘やかしすぎないように、絶えず恐れつつ育てなさい。

これこそ、あなたが何よりも警戒を固めなくてはならない点である。血を分けたわが子をいとおしみ、可愛がりたいと思うのは自然の情である。だが、そうした自然な情愛の行き過ぎこそ、恐れなくてはならないことである。その愛情に妨げられて、わが子の欠点が何も見えなくなったり、他人がわが子のことで忠告してくれる言葉に全く耳を貸せなくなったりしないように用心しなくてはならない。その愛情の行き過ぎゆえに、子どもの悪い素行を見逃したり、罰を与え懲らしめるのが忍びないなどと心くじけたりしないように用心しなくてはならない。

罰や懲らしめが愉快でないことは私も承知している。愛する者に苦痛を与え、涙をふりしぼらせることほど不快なことはない。しかし人間の心というものの性質からして、一般的原則としては、子どもを懲らしめもせず正しく育て上げられるなどというのは、あだな望みというべきである。

駄目にするとは非常に内容豊かな言葉であり、悲しいほど幅広い意味を持っている。さて、子どもを駄目にする最も簡単な方法は、何でも思い通りにさせることである。---悪いことをしていても放っておき、その罰を与えないでおくことである。私は切に願う。決してそのようなことを行なってはならない。たとえ、いかに忍びがたく感じようとも、わが子の魂を滅ぼしたいというのでない限り、決して行なってはならない。

この件について、聖書が何もはっきりしたことを語っていないなどと云うことはできない。「むちを控える者はその子を憎む者である。子を愛する者はつとめてこれを懲らしめる」(箴 13:24)。「望みのあるうちに、自分の子を懲らしめよ。その泣き声に心andraげてはならない」(箴 19:18 <英欽定訳>)。「愚かさは子どもの心につながれている。懲らしめの杖がこれを断ち切る」(箴 22:15)。「子どもを懲らすことを差し控えてはならない。むちで打っても、彼は死ぬことはない。あなたがむちで彼を打つなら、彼のいのちをよみから救うことができる」(箴 23:13、14)。「むちと叱責とは知恵を与える。わがままにさせた子は、母に恥を見させる」。「あなたの子を懲らせ。そうすれば、彼はあなたを安らかにし、あなたの心に喜びを与える」(箴 29:15、17)。

これらの聖句の何と力強く、力のこもったものであることか！ 多くのキリスト者家庭で、これらがほとんど知られていな

いように思えるという事実の、何と物悲しいことか！ その子どもたちは叱責を必要としているのに、まず叱られることはない。懲らしめを必要としているのに、懲らしめられることはほとんどない。しかし、この箴言という書物は、時代遅れのものでも、キリスト者にとって不適当なものでもない。これは神の靈感によって与えられたもの、また有益なものである。それが与えられたのは私たちが教えを受けるためであり、その点は、ローマ人への手紙やエペソ人への手紙と何ら変わることはない。実際、箴言の助言に注意を払わずに子育てをしている信仰者は、書かれたことを越えて賢くなっているのであり、非常に大きな間違いを犯しているのである。

子どもを持つ父親の方、また母親の方に私ははっきりと云いたい。わが子が過ちを犯していても決して罰を与えない親は、子どもに最悪の害を及ぼしているのである。私たちはあなたがたに警告する。これこそ、あらゆる時代の神の聖徒らが、あまりにもしばしば破船の憂き目に会ってきた岩礁である。私が口を酸っぱくしてもあなたがたに勧めたいのは、まだ間に合ううちに賢くあれ、それを避けて進め、ということである。エリの場合を見るがいい。エリは、息子のホフニとピネハスが、「みずからのろいを招くようなことをしているのを知りながら、彼らを戒めなかった」。彼は息子たちを厳しく叱責しなくてはならないときに、おざなりの、なまぬるい小言しか云わなかった。そして、こうした事態がいかなる結末を招いたことか！ 老いた彼は、ふたりの息子が一度に戦死したのを聞かなくてはならず、自分のしらが頭を、悲しみながら、よみに下らせることになったのである（Iサム 2:22-29; 3:13）。

ダビデの場合も見るがいい。彼の子らとその罪の物語を読んで心痛まない者がいようか？ アムノンの近親相姦、---アブシヤロムの殺人と思い上がった反逆、---アドニヤの狡猾な野心---まことにこれらは、神の心にかなうと云われた人物が自分の家庭から受ける傷としては苛酷な深手であった。しかし、ダビデの側には何の落ち度もなかったのだろうか？ 残念ながら、ダビデに責任の一端があったことに疑いはないと思う。I列王記 1:6 にあるアドニヤの記事に、すべてを解き明かすかぎが見られる。「彼の父は存命中、『あなたは どうしてこんなことをしたのか。』と言って、彼のことで心を痛めたことがなかった」。ここに、あらゆる災厄の根源があった。ダビデは子どもを甘やかしすぎる父親だったのである。---わが子に好き放題にさせておく父親だったのである。---そして彼は、自分の蒔いたものの刈り取りをすることになったのである。

私は親である方々に願いたい。わが子を可愛いと思うなら、甘やかしすぎないように用心することである。忘れないでほしい。あなたがたの第一の義務は、子どもたちの願いや好みをかなえてやることではなく、彼らにとって本当にためになることは何かを考えることである。---彼らにこびるのではなく、彼らをしつけることである。---彼らの機嫌をとるのではなく、益をもたらすことである。

たとえどれほどわが子を愛していようと、子どもが気まぐれやわがママを起こすたびに従ってはいならない。決して彼らに、自分の意志にはだれも逆らえないのだ、一言ほしいと云えば何でも与えられるのだ、などと思わせてはいならない。私はぜひとも願いたい。わが子を偶像にしてはいならない。神が彼らを取り去り、あなたの偶像を破壊し、あなたに自分の愚かさを思い知らせるようなことが起こらないようにしなくてはならない。

わが子に向かって、「いけません」、と云えるようになることである。何であれ、あなたが子どもにふさわしくないとすることは拒否できるところを、子どもに見せてやることである。不服従はすぐさま罰し、罰を与えると云ったときには、口先だけの脅しでなく、ちゃんと実行できるところを見せてやることである。あまりにも頻繁に脅してはいならない*4。人は脅されただけでは死なないし、過ちは脅されただけではなくならない。罰を与えるのはここぞというときだけにし、そのときには本気で厳しく罰することである。---年がら年中、取るに足らないような罰を与えているのは、実に低劣なやりかたである*5。

「大したことではない」、と考えて、小さな過ちを見逃さないよう用心するがいい。子どものしつけに小さなことなど何一つない。すべてが重要である。小さな雑草も、大きな雑草に劣らず引き抜く必要がある。放ったらかしにしておく、それは見る間に大きく育つ。

私は読者の方に云いたい。信じてほしいが、もし何かあなたがたの注意に値する点があるとしたら、それはこのことである。これが苦しく厄介なものであることは承知している。しかし、もしあなたがたが、子どもの小さいうちに苦勞をいとうならば、彼らが成長したとき、彼らはあなたに苦勞をかけるであろう。好きな方を選ぶがいい。

13. 子どもを教育するには、神がその子らを訓練なさるしかたを常に覚えておきなさい。

聖書によれば、神はこの世界に1つの選びの民---1つの家族を有しておられる。罪を確信し、平安を求めてイエスのもとに逃れ来た、あわれな罪人の全集団がその家族である。心からキリストを救い主として信ずる私たちはみな、その一員なのである。

さて父なる神は、この家族に属するひとりひとりを絶えず訓練し、永遠に天国でご自身とともに住む者としてふさわしくしようとしておられる。御父は、葡萄の木に多くの実を結ばせようとして枝を刈り込む農夫のように働かれる。御父は私たちひとりひとりの性格をご存知である。---私たちにからみつく罪---私たちの弱さ---私たちひとりひとりに特有の欠点---私たちの個別の必要をよく知っておられる。私たちの仕事は何か、どこに住んでいるか、いかなる人々を人生の伴侶や友人としているか、どのような試練の中にあり、何が誘惑となっているか、いかなる特権を受けているかを知悉しておられる。これらすべてを知った上で御父は、常にすべてを私たちの益のためになるよう整えておられる。御父はその摂理によって、私たちひとりひとりに最も豊かに実を結ばせるため、まさに必要なものを割り当ててくださる。---私たちが耐えられるだけの日光と雨水---私たちが忍べるだけの苦難と楽しみを割り当ててくださる。このページを読む読者の方に私は云いたい。わが子を賢くしつけたければ、父なる神がいかにご自分の子らをしつけておられるかによく注意することである。御父はすべてを完璧に行なわれるお方であり、御父が採用しておられる方針に決して間違いはない。

そこでまず注意したいのは、神がいかに多くのものをその子らに与えずにおくことをしておられるか、ということである。神の子らのうち、何かを神に願ってそれを絶対にならえてもらえなかったという経験をしていない者はほとんどいないだろうと思う。彼らはしばしば何かをしたいと願うが、必ずそれを妨げる何らかの障壁があるのである。あたかも神が、それを私たちの手の届かないところに置いて、「これはお前のためにならないものだ。絶対にさわってはならない」、と云っているかのようである。モーセはヨルダン川を渡って、美しき約束の地を一目見たいと必死に願ったが、知ったの通り彼の願いは決してかなえられなかった。

次に注意したいのは、神がいかにしばしばその民を、一見私たちの目には暗く神秘的な道へとわざわざ導かれるか、ということである。私たちは、自分に対する神のお取り扱いの意味を必ずしも常に理解することはできない。自分の足が踏みしめている道が理にかなったものとは思えない。時として、あまりにも多くの試練に襲われるため---あまりにも多くの困難に取り囲まれるため---、私たちにはそうした一切切の必要性がまるで見当もつかないことがある。あたかも御父が私たちの手を取って暗闇の中を通り抜けつつあり、「何も聞かず、黙ってわたしについて来るがいい」、と云っているかのようである。エジ

プトからカナンへは一直線に続く道が伸びていたが、イスラエルはその道に導かれなかった。むしろ荒野を通る迂回路へと導かれた。そしてこれは、その時にはつらく思われた。「民は、途中でがまんができなくな」と記されている（出 13:17; 民 21:4）。

さらに注意したいのは、神がいかにしばしばその民を試練や患難によって懲らしめることをなさるか、ということである。神は彼らに十字架や失望をお送りになる。彼らを病に伏させ、財産や友人を奪い、ある立場から別の立場に移し、血肉にとつてはこの上もなくつらい物事によって訪れなさる。このため時として私たちは、あまりの重荷に気も絶えんばかりになることがある。限界を超えた力で押しつぶされつつあるように感じ、自分を懲らしめる御手に向かってつぶやきたくなることすらある。使徒パウロは、肉体に1つのとげを持つように定められた。それは疑いもなく、何らかの激しい苦痛を伴う肉体的試練であったに違いない。私たちは、それが何であったのか正確なところはわからないが、このことだけははっきりしている。----彼はそれが取り除かれるようにと三度も主に願ったが、それは取り去られなかったということである（II コリ 12:8、9）。

だが私はこのページを読んでいる方に問いたい。こうしたすべてのことにもかかわらず、神の子らのうちひとりでも、御父が自分を愚かしく取り扱ったなどと考える者があったと聞いたことがあるだろうか？ 否、決してないであろう。神の子らは常にあなたに告げるはずである。長い目で見たとき、自分たちが思い通りのことを許されなかったのは実にほむべきことであり、神は、自分たちが自分のためにできたはずのことよりも、はるかにまさって良いことを自分たちのためになしてくださった、と。しかり！ そしてまた彼らは、こうも告げてくれるであろう。神のおとりはからいが自分たちに得させてくれた幸せは、自分が独力で得られたらう幸せよりもずっと多く、神のなさり方は、時には不可解に思えても、楽しみの道、平和の小道であった、と。

私があなたに願いたいのは、御民に対する神のお取り扱いから学びとるべき教訓を心に深く刻み込んでほしい、ということである。もしも何か、わが子に害を与えるだろうと思われるものがあるなら、それが何であれ、またその子自身の願いがどうあれ、恐れることなく、与えずにおくがいい。それが神の方針である。

いま現在、子どもに見れば賢明なものと思えないような命令をも、ためらうことなく下すがいい。また今のその子には道理に合わないように見えるような道にも、ためらうことなく導いていくがいい。それが神の方針である。

また、もしわが子の魂の健康のために必要であると考えのなら、どれほど痛ましく思われても、またいついかなるときも、ひるむことなく子どもを罰し、懲らしめるがいい。人の心に必要な薬は、苦いからといって退けてはならないということを忘れないようにするがいい。それが神の方針である。

そして何よりも、こうした方針によって子どもをしつけることで、その子が不幸せになるのではないかなどと案じないようにするがいい。そのような迷妄に陥らないよう私はあなたに警告する。嘘ではない。常にわがままし放題にさせられることほど確実に不幸に至る道はない。自分の意向を妨げられたり拒否されたりすることは、私たちにとって幸いなことである。そうしたことがあればこそ、いざ楽しみが来たときにそれを嬉しく思うことができるのである。日頃から絶え間なくちやほやされている子どもは、確実に利己的な人間になる。そして利己的な人間や甘やかされた子どもたちは、請け合ってもいいが、めったに幸せになることがない。

このページを読む読者に私は云いたい。神よりも賢くなつてはならない。----わが子は、神がその子らを育てるように育てる

ことである。

14. 子どもを教育するには、親自身の模範が持つ影響力の大きさを絶えず心にとめていなさい。

いくら教えても、忠告しても、命令しても、それがあなた自身の生き方によって裏打ちされていなければ、ほとんど益はない。あなたが自分の助言と矛盾するような行動をしている限り、あなたの子どもたちは、決してあなたの言葉をまともにとりあわず、あなたが真剣に云うことを聞かせようとしているなどとは思わないであろう。ティロットスン大主教は賢明な言葉を残している。「子どもたちに良い教えと悪い見本を与えるのは、頭では彼らに天国への道を指し示しつつ、手では彼らを地獄への道に引きずっていくことにほかならない」、と。

私たちは、模範にどれほど強大な力があるかほとんどわかっていない。だが、この世で自分だけ孤立して生きていられる人はだれひとりいない。私たちは常に、何らかのしかたで、良きにつけ悪きにつけ、神のために、あるいは罪のために、身の回りにいる人々に影響を与えつつある。---彼らは私たちの生き方を注視しており、私たちの行動を目に留め、私たちのふるまいを観察し、私たちが常日頃行なうのを見せていることこそ、私たちが正しいと考えていることだろうと正しくも推察するのである。そして私が思うに、模範が何よりも強大な力をふるうのは、親子関係においてである。

父親、また母親である方々に私は云いたい。忘れてならないのは、子どもたちは、耳からよりも目から多くを学ぶものだということである。いかなる学校にもまして、人格の上にくっきりとした痕跡を刻み込むのは家庭にほかならない。どれほど優秀な教師が植えつける影響にもまして、彼らの思いに感化を与えるのは、彼らがあなたがたの炉端で見聞きすることである。模倣は、子どもにとって記憶よりもはるかに力強い原理である。彼らが見ることは、彼らが教えられることよりもはるかに強い影響を彼らの思いに及ぼす。

では、子どもたちの前で何をするにも気をつけることである。「子どもの前で罪を犯す者は、2つの罪を犯す」、という格言は正しい。むしろあなたは家族のだれもが読めるような、しかも鮮明に読みとれるような、キリストの生きた手紙となるよう努めるがいい。神のみことばに対する敬虔さ、祈りにおける敬虔さ、恵みの手段に対する敬虔さ、主の日に対する敬虔さにおいて模範となるがいい。---言葉と、気立てと、勤勉さと、節制と、信仰と、愛と、親切と、謙遜とにおいて模範になるがいい。あなたの子どもたちが、あなたのうちに見もしないようなことを行なうようになると考えてはならない。あなたは彼らの範となる原型であって、彼らはあなたのすることなすことを写し取るのである。あなたの情理を尽くした言葉も小言も、あなたの賢明な命令も良き忠告も、彼らは全然理解しないかもしれない。しかし、あなたの生き方だけは理解できるであろう。

子どもたちは非常に目端のきくものである。ちょっとした偽善をも鋭く見抜き、あなたが考えたり感じている本音の部分を鋭く発見し、あなたの身ごなしや意見をたちまち身につけてしまう。あなたがしばしば身を持って体験するのは、子は親の鏡だ、ということである。

征服者カエサルが戦闘において兵士たちに語るのを常とした言葉を覚えておくがいい。彼は「前へ行け」とは云わず、常に、「ついてこい」、と云った。あなたが子どもを教育する際にも、それと同じでなくてはならない。子どもたちは、あなたが軽視しているような習慣を身につけることはめったになく、あなたが自分で歩んでもいないような道を歩くことはめったにない。自分が実行してもいないようなことをわが子に説き聞かす人は、絶対に先へ進まないような仕事をしているのである。ギリシ

ヤ神話の語るオデュッセウスの妻ペーネロペイアは、その織物を昼間は織り込み、夜になるとほだき続けたというが、それと全く同じである。良い模範を示すことなしに子どもたちを教育しようとしている親は、片手で建て上げようとしていることを、もう一方の手で引き倒しているのである。

15. 子どもを教育するには、罪の力のことを絶えず覚えていなさい。

非聖書的な期待をふくらませる人がいないように、このことについても手短かに云っておこう。

あなたは決して、自分の子どもの心がまっさらな白紙であるとか、正しい手段を用いれば何の問題も生じないはずだ、などと期待してはならない。はっきり警告しておくが、そのような期待は裏切られるのが落ちである。がんぜない幼児の心にすら、どれほど多くの腐敗と悪がひそんでいるものか、また、それがいかに早々と実を結ばせ始めるかは、見るも痛ましいほどである。かんしゃく、わがまま、うぬぼれ、嫉妬、むくれ、向かっ腹、怠け、自己中心、ごまかし、ずる、嘘、偽善、そして悪い習慣を身につけるすさまじいばかりの素早さ、良い習慣を身につけるすさまじいばかりの遅さ、望みをかなえるためならなりふりかまわぬ変わり身の早さ、---あなたは、こうしたことのすべてが、あるいはそのいくつか、血を分けたわが子のうちにも生じてくるのを見る覚悟をしていなくてはならない。これらは、ごく若い年齢のうちから、少しずつ忍び込んでくるであろう。これらが、いかにも自然に現われてくるようすは、ほとんど驚きと云うしかない。子どもたちは何の訓練も受けなくとも罪を犯すことだけはできる。

しかしあなたは、自分の目にすることで気を落としたり、落胆してはならない。幼い心が罪の巣窟ともなりうることを、あやしむべきことや、異常なことと考えるてはならない。これは、祖先アダムが私たちに残した唯一の運命なのである。それは、私たちが世に持って生まれ出た、かの墮落した性質であり、私たち全員に属する、かの遺産なのである。むしろそのことであなたは、より一層熱心に、神の祝福を得ればそうした害毒を打ち消すこともできるであろう、あらゆる手段を用いるようにするがいい。そのことであなたは、より一層細心の注意を払って、自分の力の及ぶ限り、わが子を誘惑の道から遠ざけようとするがいい。

たとえだれかから、良いお子さんですね、しつけが行きとどいていて、見ていて何の心配もありませんね、と云われても、耳を貸してはならない。むしろ子どもたちの心は、火口のように常に燃え上がりやすいものであると考えるがいい。最良の状態にあってさえ、火花1つで彼らの腐敗はたちまち燃えさかるものである。親たる者は、どれほど用心しても用心のしすぎということはめったにない。わが子が生来墮落したものであることを覚えておき、注意するがいい。

16. 子どもを教育するには、聖書の約束を絶えず覚えていなさい。

気落ちする人がないように、このことについても手短かに云っておこう。

あなたの味方となる平明な約束がある。「あなたの子をその行く道にふさわしく教育せよ。そうすれば、年老いても、それから離れない」*(箴 22:6)。このような約束が与えられている意味を考えてみるがいい。約束は、聖書が記される以前に、族長たちの心を励ました唯一の希望のともしびであった。エノク、ノア、アブラハム、イサク、ヤコブ、ヨセフ、---これらの人々はみな、ほんのわずかな約束に立って生き、その魂を生き生きと輝かせていた。約束は、あらゆる時代において信仰者を

支え、力づけてきた強壯剤である。自分に味方する平明な聖句が1つありさえすれば、その人は決して落胆することがない。父であり、母である方々に私は云いたい。あなたの心が失意に沈みつつあり、今にもうなだれてしまいそうなときには、この聖句の言葉を見つめて、慰めを得ることである。

約束をしてくださったのはどなたか考えてみるがいい。これは、偽ったり悔いたりするような、人間の言葉ではない。これは、決して変わることはない王の王のことばなのである。神は、約束されたことを成し遂げられないだろうか。神にとって、できないことが1つでもあろうか。人にはできないことが、神にはできるのである。私は読者の方々に云いたい。もしも私たちが、いま論じている約束の益を受け取っていないのだとしたら、非は神にではなく、私たちにあるのである。

また、この約束から慰めを受けるのを拒絶する前に、そこに何がふくまれているかを考えてみるがいい。これは、良き教育が特に実を結ぶ、ある特定の時期について語っている。----「年老いても」。確かにここには慰めがある。あなたは、自分の目では、苦心の教育の成果を目にすることができないかもしれない。だが、あなたが死んで世を去った後で、そこからどれほど幸いな実りが生ずるかはわからないのである。神はそのご方針として、何もかもを一遍にお与えにはならない。「後になって」こそ、自然界の事がらにおいても、恵みの事がらにおいても、神がしばしばお選びになる、お働きの時期である。「後になって」こそ、患難が平安な義の実を結ばせる季節である（ヘブ 12:11）。「後になって」こそ、あの父親のぶどう畑で働くことを拒んだ息子が、悪かったと思って出かけて行った時であった（マタ 21:30）。そして、「後になって」こそ、成果をすぐには目にすることのない両親が待ち望まなくてはならない時期である。----あなたは、希望をもって蒔き、希望をもって植えなくてはならない。

御霊は云われる。「あなたのパンを水の上に投げよ。ずっと後の日になって、あなたはそれを見いだそう」（伝 11:1）。私は確信している。たとえ両親の生前には、その良い教育によって益を受けたというしるしを全く見せなかった多くの子どもたちが、最後の審判の日には立ち上がって、そのことで両親に感謝するであろう、と。それでは、信仰によって前進し、あなたの労苦が全く無駄になることはないと堅く信ずるがいい。エリヤは、あのやもめの子が息を吹き返すまで三度、その子の上に身を伏せた [I 列 17:21]。エリヤにならって、屈せず最後まで努めることである。

17. 最後に、子どもを教育するには、自分の行なうすべてのことに祝福があるように絶えず祈っていなさい。

主の祝福がなければ、あなたがどれほど手を尽くして努力しても何の益にもならないであろう。主はすべての人の心を御手の中におさめておられ、主が御霊によってあなたの子どもの心に触れてくださらなければ、いかなる労苦も無駄骨折りととなる。それゆえ、あなたが彼らの心に蒔く種には、不断の祈りという水を注ぐがいい。主は私たちが祈りたいと思う以上に、はるかに祈りを聞き届けたいと願っておられる。私たちが願う以上に、はるかに祝福を与えようとしておられる。----しかし主は、私たちがそれを乞い求めることを大きな喜びとなさるのである。それで私は、この祈りということを、あなたが行なうすべてのことの冠石として、また固めのしるしとして、はっきり示しておきたいのである。私がひそかに確信するところ、多くの祈りが積まれた子は、めったに滅びることがない。

あなたの子どもたちを、ヤコブがその子らを見たような目で眺めるがいい。彼はエサウに、これは「神があなたのしもべに恵んでくださった子どもたちです」、と云った（創 33:5）。ヨセフがその子らを見たような目で眺めるがいい。彼は自分の父に、「神が.....私に授けてくださった子どもです」、と告げた（創 48:9）。詩篇作者と同じように、わが子を「主の賜物、報

酬」*とみなすがいい(詩 127:3)。それから、聖なる大胆さをもって主に向かい、ご自分の賜物に対して恵み深く、あわれみ深くあられるように願うがいい。いかにアブラハムがイシュマエルのためにとりなしているか注意してみるがいい。それは、わが子を愛していたからである。「どうかイシュマエルが、あなたの御前で生きながらえますように」(創 17:18)。いかにマノアがサムソンのことで御使いに語っているか見るがいい。「その子のための定めとならわしはどのようにすべきでしょうか」(士 13:12)。いかにヨブが子どもたちの魂のことを心細やかに配慮していたか注目するがいい。「彼は.....彼らひとりひとりのために、それぞれの全焼のいけにえをささげた。ヨブは、『私の息子たちが、あるいは罪を犯し、心の中で神をのろったかもしれない。』と思ったからである。ヨブはいつもこのようにしていた」(ヨブ 1:5)。私は親である方々に云いたい。もしわが子を愛しているなら、行って同じようにしなさい。あなたは、彼らの名前を何度、「贖いのふた」の前に持ち出しても、やりすぎということはない。

さて、結論として、このページを読んでいる方々にもう一度強調させていただきたい。わが子を天国へ向けて教育したければ、用いることのできる手段をすべて用いることが必要であり、重要である。

云うまでもなく神は主権の神であり、みこころによりご計画のままをみな実現される方である[エペ 1:11]。私も、レハブアムがソロモンの子であり、マナセがヒゼキヤの子であり、必ずしも敬虔な両親から敬虔な子どもが生まれるわけではないことは承知している。しかし私は、神が手段によって働かれる神であることも知っており、もしもあなたがこれまで私の言及してきたような手段を軽視するなら、あなたの子どもたちがまともに育つことはまずありえなくなると確信している。

父であり母である方々に私は云いたい。あなたは自分の子どもたちに洗礼を受けさせ、キリスト教会の会員名簿に名を連ねさせることはできるかもしれない。---敬虔な名付け親に立ってもらい、子どもたちの代理人として答えてもらい、あなたを祈りで支援してもらうことはできるかもしれない。---子どもたちを最高の学校へやり、聖書と祈禱書を買って与え、詰め込み教育で頭でっかちにすることはできるかもしれない。---しかし、もしもその間、規則的な家庭教育が全くなされていないとしたら、はっきり云っておくが、それは結局、あなたの子どもたちの魂をひどい目に遭わせることになると思う。家庭こそ、習慣が身につく所である。---家庭こそ、人格の土台が据えられる所である。---家庭こそ、個人の趣味や好みや意見に先入主を与える所である。ならば、ぜひとも細心の注意を払って家庭教育を行なっていただきたい。だれよりも幸いなのは、ボルトンのようにその死の床にあって子どもたちにこう云えるような者である。「私は心から信じている。お前たちのうちのだれひとりとして、万が一にも未回心の状態のままキリストの法廷で私と会うようなことはないだろう、と」。

父であり母である方々に私は、神と主イエス・キリストとの前で、おごそかに命ずる。いかなる労苦を伴おうと、わが子を行く道にふさわしく教育しなさい。こう命ずるのは、単にあなたの子どもたちの魂のためばかりではない。あなた自身の将来の慰めと平安のためである。実際そうすることは、あなたのためになることなのである。実際あなた自身の幸福が、このことに大きくかかっているのである。いまだかつて、子どもほど人の心を鋭く刺し貫く矢を射けてきた弓はない。子どもほど苦い杯を人に味あわせてきたものはない。子どもほど悲しい涙を人にふりしぼらせてきたものはない。アダムは心から同意するであろう。ヤコブは心から同意するであろう。ダビデは心から同意するであろう。この世に、子どもが両親にもたらすものにまさる悲しみはない。おゝ、心しておくがいい。さもないと、あなた自身の怠慢によって、年老いたときあなたにふりかかる惨めさが幾重にも積み重なっていくであろう。心しておくがいい。さもないとあなたは、目がかすみ体力も衰えたときに、恩知らずなわが子の無慈悲な扱いを受けて泣くことになるであろう。

もしあなたが、わが子によって元気づけられ、老後をみとってほしいと本当に願うのであれば、----もしあなたが、わが子を呪いではなく祝福としたければ、----悲しみではなく喜びとし、----ルベンのような者ではなくユダのような者とし、----オルバのような者ではなくルツのような者とし、----ノアのようにわが子の行為を恥じることなく、リベカのようにわが子によって生きているのがいやになるようなことがないようにしたければ、もしこれらがあなたの願いだとするなら、手遅れにならないうちに私の助言を思い起こし、彼らを正しい道へ向けて教育するがいい。

そして私の方では、しめくりとして、この論考を読むすべての人々のため、神に祈りをささげたいと思う。どうかあなたがたがみな、神に教えられ、自分自身の魂の尊さを感じとれるように、と。こうしたこともあるため、あまりにもしばしばバプテスマは単なる形式になりはて、キリスト教教育は馬鹿にされ、省みられないのである。あまりにもしばしば、親たち自身に信仰のありがたみが感じられていないため、子どもに信仰が必要であるとの実感を持っていないのである。多くの親は、生まれながらの状態と恵みのうちにある状態との間にある途方もない違いを悟っていない。それゆえ子どもを放ったらかしにしたまま満足していられるのである。

願わくはいま主が、罪は神がお憎みになる忌まわしいものであることを、あなたがた全員に教えてくださるよう。そうなれば、あなたがたは自分の子どもの種々の罪のために嘆き、彼らを火から取り出した燃えさしのようにつかみとろうと努めるはずである。

願わくは主が、キリストがいかに尊く、いかに力強く完全なみわざを私たちの救いのために成し遂げてくださったかを、あなたがた全員に教えてくださるよう。そうなれば、あなたがたはあらゆる手段を用いて自分の子どもをイエスに導き、彼らがイエスによって生きられるようにするに違いない。

願わくは主が、いかに聖霊があなたがたの魂を新しくし、聖め、生かしてくださるのに必要なお方であるかを、あなたがた全員に教えてくださるよう。そうなれば、あなたがたは自分の子どもに、聖霊を求める祈りをうむことなくささげさせ、心に聖霊が力をもってやって来られ、自分を新しく造りかえてくださるまで安心しないようにさせるに決まっている。

願わくは主が、このようにあなたがたを変えてくださるよう。そうなれば私は、あなたがたの行なう家庭教育に希望を持つことができる。----あなたがたは、自分の子どもをこの世のためにもよく教育し、来たるべき世のためにもよく教育し、地上のためにもよく教育し、天国のためにもよく教育し、神のため、キリストのため、永遠のために、彼らをよく教育するであろう、と。

キリスト者の家庭教育 [了]

*1 牧師として云わずにおられないことだが、子育てほど人を頑迷にする主題はまれである。これには私も全く啞然とさせられることがある。他の点ではしごく思慮分別のあるキリスト者が、わが子が間違っていると、非難に値するという点だけはなかなか認めようとしない。少なからぬ数の親たちに対して私は、あなたは罪人ですと面と向かって語る方が、あなたの子どもが悪いことをしましたと云うよりもずっと心安く感ずる。[本文に戻る]

*2 「少しでも人生に通じた人であれば、人々の意見や考え方のおかげに、彼らの受けた教育の影響を逐一見抜くことができよう。育児室を出る子どもたちは、その後の一生の間、彼らの目立った特徴となるものを携えて出てくるのである。」----セシル[本

文に戻る]

*3 子どもの宗教教育を何歳から始めるべきかについては、万人向けの規則を定めることはできない。ある子どもたちの知性は、他の子どもたちよりもはるかに幼いうちから発現するように見える。幼すぎて失敗することはめったにない。3歳児の子どもでさえ、どれだけ深く信仰を理解できるかということについては数々の素晴らしい実例が記録されている。[本文に戻る]

*4 一部の親や子守たちは、何かちょっとしたことがあると、しばしば十分な理由もなしに、「いけない子ね」、と口癖のように子どもに向かって云う。これは非常に愚かな習慣である。責め言葉は、それ相応の理由もなしに決して用いるべきではない。[本文に戻る]

*5 子どもを罰する最良のやりかたについては、いかなる一般規則も定めることはできない。子どもたちの性格は千差万別であって、ある子どもには厳しすぎるような罰が、別の子には痛くもかゆくもないのである。ここで私はただ、いかなる子どもをもむちで打ってはならないという現代の考えに断固たる抗議をしておきたい。疑いもなく一部の親たちは、肉体的な懲らしめをあまりにも頻繁に、またあまりにも激しく用いすぎている。しかし、他の多くの親たちは、私の恐れるところ、それをいかなさすぎているのではないか。[本文に戻る]

3,第3に、今こそ「主の教育と訓戒」が必要です。

現代社会で、問題になっている家庭内暴力や校内暴力は、神のイメージを持たない両親と子供の関係を如実に表しています。親子の正しい関係が見失われ、親の権威は地に落ちています。それは、神を否定する社会の当然の帰結であるとも言えます。しかし、単に先に生まれた者だから従えとか、親は、子供を養育しているのだから従えなどと言っても、服従の根拠にはなりません。まして、親が正しい行いをせず子供にだけ要求するのは無理です。今こそ、両親も子供も、共に神のもとに帰ってこそ、私達は正しい家族関係を築く事が出来るのです。主にあって両親に従う時、神はこれを喜び、祝福して下さいます(エペソ6:3)

また「父たちよ。主の教育と訓戒によって育てなさい」と命じています(6:4)。「教育」とは、言葉や文字で教えるばかりでなく、自分の感情や言葉をコントロールする行動力を幼い時から訓練する意味もあります。また「訓戒」とは、言葉によって諭し、励ますしつけの事です。

ではそれを誰から始めるのでしょうか。それは親自身であり、私達大人です。自分も共に神の言葉の真理に基づく生活を築く所に真の教育があります。つまり親及び私達大人は、子供に日々の信仰生活の模範を示すことが大切です。

2B 父が子を訓練する 4

父たちよ。あなたがたも、子どもをおこらせてはいけません。かえって、主の教育と訓戒によって育てなさい。

服従するという勤めは、相互的なものであることを夫婦関係の中で学びましたが、それは親子関係においても同じです。親、とくに父親には、子どもに主にある教育と訓戒を与えることによって、主に従わなければいけません。

子供に主の教育と訓戒を与える第一歩は、自分自身を主の教育と訓戒の下に置くことであります。自分を愛して、甘やかしているならば、子供に対しても何も言えなくなってしまいます。子供に言えば、それがすぐに自分に跳ね返ってくることを知っているからです。

ダビデのことを思い出してください。彼はバテ・シェバと姦淫の罪を犯し、その夫ウリヤを殺す罪を犯しました。彼は罪は赦されましたが、その後、自分の子供たちが罪を犯しました。息子アムノンが、違う母親を持つ妹のタマルを犯したとき、ダビデはアムノンを懲らしめることができませんでした。それゆえタマルの兄アブシャロムがアムノンを憎み、そして彼を殺しました。けれども、ダビデは、アブシャロムを懲らしめることができませんでした。そこでアブシャロムはさらに罪を重ねて、とうとうアブシャロムは戦いの中で死にました。これらはみな、ダビデが自分自身を主にあって戒めることができず、罪を犯してしまったからであり、そして子どもを訓戒することができなかったからなのです。ですから、まず自分自身が主の教育と訓戒の中に生きることが必要なのです。

そして、神の代表をしているという自覚を持ち、どのようにしたら自分の息子や娘が、神を神として理解することができるかを、いろいろ考えて、必要な言葉をかけてあげることが大切です。これが、パウロがここで勧めていることです。

父たちよ。子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。

この「おこらせる」のもともとの意味は、「こすって、ひりひりさせる(irritate by rubbing)」というものです。そこから、「走るようにせかされて、疲れ果てる人」という使われ方をしました。「ほら、これやりなさい。」「まだ、こんなことしてないの!」「だめでしょ!」と続けざまに怒鳴られたり、急かされて、ついに子供が疲れて、そしてついに、どうすればよいか分からなくさせてしまいます。これが、ここでいう「おこらせてはいけません。」です。ですから、パウロは、「気落ちさせないためです。」と言っています。親は、一貫性をもって、子供をしつけなければいけません。そして、怒鳴るのではなく、静かに、真剣に子供に語りかける必要があります。

子どもをおこらせてはいけません

「子どもをおこらせてはいけません。彼らを気落ちさせないためです。」(コロサイ 3:21)

子どもを叱るなということではありません。むしろ聖書は別の箇所、本当に叱るべき時に叱らないのは子供をだめにすることだと教えています。ここでいうのは、理不尽な叱り方をしてはいけなく、必要ならば弁明の機会をしっかりと与えなさいということです。子供が何か失敗した時、頭ごなしに「何やってんの」と叱りつけでしまうことがあります。すると子供は弁明する勇気もなくなってただ黙るだけ、そうすると並タイライラして「どうして黙っているの」とまた叱ってしまう、こんな経験はないでしょうか。